
悪魔払い探偵事務所 ～捻くれ所長とニートな私の更生記～

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔払い探偵事務所　～捻くれ所長と二トな私の更生記～

【Nコード】

N7450S

【作者名】

月島　真昼

【あらすじ】

……さて、超逃げたいです。のっぴきならない事情によって訪れた「悪魔払い探偵事務所」なる怪しげな看板の掛かった雑居ビルの一室。扉を二度ノックすると「どーぞ」と平坦な声が返ってきました。扉を開くとそこにいた男性は私を一瞥し、舌打ちを一つします。「あんたが川口さん？」男性は超だるそうな声で言いました。社会不適合者に片足を突っ込んだ私とおおよそ人間性の壊滅している所長が、怪奇っぽいものに挑む愛と勇気と希望のお話！

ニートな私の初仕事

私が悪魔払い探偵事務所なる怪しげな看板の掛かった雑居ビルの一室を訪れたのは、事態がのびきならない状況に陥ってからのことでした。といっても私は依頼人としてそこを訪れた訳ではありません。私がもし依頼人だったなら人間性の壊滅しているあの赤山慎吾に依頼などしないでしょう。

私が悪魔払い探偵事務所を知ったのは大学一回生の夏休みのことでした。夏休み、といっても私は大学生と名のついたニートでありましたので休みもそうでない日にも大差はありません。あえていうならば大学に行かなければならないという心理的圧迫感がないくらいでしょうか。ええ、私はニートでした。私のニートっぷりときたらそれはもう完全無欠なまでにニートでした。

少し私の話をさせていただきますと、私は大学に入学して以来、女子寮に一人暮らしをしていて親元を離れています。そのためにわざわざ偏差値のほどほどに高い都会の学校に入学したと言っても過言ではありません。全ては自堕落のためです。私は口うるさい親元を離れ、朝は寝て昼は寝て夜は寝る生活を確保するただけに都会の大学を受けたのです。そのときの私の執念たるやそれはもう凄まじいものでした。私は至って普通の学力の一高校生に過ぎませんでしたが、それは容易なことではありませんでした。しかし大学に受かりさえすればもうこちらのものです。私は気が向いた時にだけ大学に向かい適当にご飯を作り食べお風呂に入りあとの時間はほとんど眠りました。勿論、学期末に行われるテストの大半はボロボロでしたがそんなことは私にとってさほど重要ではありません。私にとって重要なことは何よりこの怠惰な楽園を維持することです。

しかし夏休みが始まって少し経ち、私の楽園は崩壊を余儀なくされました。

私がそれに気づいたのはコンビニエンスストアに出向いた時です。

学生寮からほど近い場所にあるそこは冷房が効いていてそこその賑わいを見せています。私は人の視線から隠れるようにして歩き、ATMの前に立ちました。八月分の仕送りを受け取るうとしたのです。いくつかのボタンを操作し、カードを通すとそこに表示された金額は五千百二十円でした。

…… what? 私はもう一度残高を確認します。一、十、百、千…… やはり液晶画面に表示される金額は五千百二十円です。私は一度コンビニを出て日影に入りました。ポケットから携帯電話を取り出して登録件数の少ないアドレス帳を開きます。母の携帯電話に掛けましたが、その電話番号はすでに使われていませんでした。登録していない実家の番号をゆくり思い出します。うる覚えの番号を打ち込んで掛けてみると「もしもし」電話に出たのは母でした。番号を間違えて知らない人が出たらどうしようと少なからず思っていた私は安堵の息を吐きながら仕送りのことを訊ねました。私が思っていたよりも悪い状況であることがわかりました。私はただ母がうつかり口座のお金を振り込むのを忘れているんだろう、程度に考えていたのです。

母の話によると、父が会社をクビになったそうです。こんな時期に？ と少し思いました。母は私にもアルバイトをしてお金を稼いで欲しいと言います。私は浦島太郎に出てくる亀の気分になりました。急に陸に打ち上げられて、果たしてどうすればいいのでしょうか。私は生まれてこの方、労働に勤しんだことがありません。気儘な一人暮らしの分際で私は最小限の消費だけで生活し、仕送りだけで月を過ごしてきたのです。当たり前に私は困惑します。とりあえず五千百二十円を引き出した私は日陰を出て学生寮に戻り、思案します。問題が問題なので父母に頼れません。頼れるとすれば…… 母方の叔父でしょうか。

叔父はいわゆる独身貴族というやつで私よりも更に偏差値の高い雲の上の大学を出ています。有名な企業の役員をしていて経済的な余裕があり、外見からも内面からもよい年の取り方をしています。

面倒見のいい人物で幼い頃はよく一緒に遊んで貰ったものでした。

そんな素敵でお金持ちな叔父様ですから、私が彼を頼ったのは経済的な援助をしてくれないかなあ、とか都合のいいことを期待してのことでした。……世の中というモノがそんなに都合のいいモノであるはずがありません。

「そうか。よし、わかった。丁度知り合いが働き手を捜していてな紹介するよ。夕方あたりにそっちに行くから」

……違うのです、叔父様。私は働きたくなのです。この退屈な引きこもりライフをどこまでも維持し続けたいだけなのです。

しかしそんな人間失格な宣言をなぜ叔父のような立派な人間に向かって謳い上げることが出来るでしょうか。私は今日の夕方は用事があつて……と急場凌ぎの嘘をつきましたが、「大丈夫、そんなものはない」となぜか叔父は断言します。意味不明です……。そのまま電話は切れてしまいました。こうなると叔父は必ず来ます。私は焦ります。時刻は三時二十一分、夕方というからには六時から七時頃に叔父はやってくるかとみてまず間違ひありません。大事なことなので二回言います。

叔父は必ず来ます。

叔父は自分に厳格な人ですから一度引き受けたことを理由もなく投げ出すようなことは絶対にしません。私はため息を吐き、出かける準備をしておくことにしました。冷蔵庫を開けて冷やした水道水をコップに入れて飲み干します。お昼ご飯を食べていなかったので冷凍していた炊いてあるお米をレンジに入れて野菜庫から玉葱と人参、それにキャベツの残りを出して適当に炒め醤油その他で味を調えました。皿に盛った辺りでレンジが音を鳴らしたので茶碗に移してラップを掛けなおしもう一度温めます。冷凍してあるものは一度では中まで温まらないのです。野菜炒めを摘み食いしていると今度こそ温め終わったのでラップを外し、中央にくぼみを作って卵を落としました。醤油を入れて混ぜます。正しい三分クッキングでした。もぐもぐ、ごくん。……最近これしか食べていないような気がしま

す。

これからすべきことを考えると、……部屋の整理でしょうか。服や下着がわりと散乱しています。いかに叔父とはいえ男性に見せられるものではありません。洗濯機に捻じ込みます。

それから、あれをして、これをして。

とやっているうちに三時間などあつという間に経過してしまいました。私がへたくそな化粧を終えたあたりでベルがなります。「開いています」と私が言うのと控えめにドアが開きました。

「やあ、久しぶりだな」

清々しい笑みです。私には眩しいくらいに。

「叔父さんはお変わりないようですね」

「なに、そろそろ四十だからね。あちこちガタがきはじめているよ」
とてもじゃありませんがそんな風には見えません。

「行こうか、用意は出来てるかな？」

「はい」

私は反射的に答えてしまいました。叔父の言葉にはどこか有無を言わせない響きがあります。学生寮を出て叔父の乗ってきた車に乗り込みます。私には車種のわからない古い車からは煙草の匂いがしました。

「歩いていける距離なんだが、これから少し用事があってね。済まない」

「お気になさらず」

叔父は私に小さい地図を渡して車を出しました。私の学生寮から目的地までの道はそう複雑ではないのに、私に読みやすいように丁寧に言葉で道筋が解説されています。男女では地図の読み方が違うというのを考慮してでしょうか。叔父は本当に有能な人間です。

叔父の車は一軒の雑居ビルの前で止まりました。「悪魔払い探偵事務所」と怪しげな看板が掛かっていて私は首を傾げます。

「ここですか？」

叔父はコクリと頷きます。私たちは車を降りました。

「僕はこれから用事があるんだけど、一人で帰れるかい？ 無理そうなら、仕事を早めに切り上げて迎えにくるけど」

「いただいたこれがあればなんとかなりそうです」

叔父は優しく微笑み、「がんばれ」と一言だけ言い残すと再び車に乗り込み去って行きました。

……さて、超逃げたいです。

しかしここで私が帰ってしまったては叔父の面目は丸潰れでしょう。叔父はあの通り優しい方ですから、表立って私を糾弾することはありえませんが、叔父の機嫌を損ねるような要因を作りたくはありません。なんだかんだいって私は叔父のことが好きなのです。ビルを見上げます。一階は車庫で二階が事務所ようです。三階から上は空き部屋なのでしょうか？ 私は勇気を出して雑居ビルの階段を登りました。ドアの前で深呼吸をします。すうー、はあー、よし。ドアを二度、ノックします。「どーぞ」と平坦な声が返ってしました。ドアを開くとその先にあつたのは、……私が想像していた「悪魔払い」とは無縁の実用的な光景でした。

そう狭くない空間の手前側にソファーが向かい合わせに二つ並んでいて小さなテーブルを囲んでいます。それらは見かけにそこそこ高価そうながわかるのですが薄く埃が積もっていました。窓は一つだけ。壁は白。左手側にはトイレが。右手側にはもう一室あるようです。そして奥には本棚と、パソコンを置いたデスクが一つあり男性が一人、行儀悪く座っていました。

男性は目元に少し掛かっている長い髪を払いながら文庫本を読んでいたのですが、私を一瞥すると舌打ちを一つしてそれをデスクに置きました。なんとというか、多大に失礼な人です。もし私が叔父の紹介などでなくここに来たのだとしたら間違いなく傍にあったテーブルを彼にぶん投げていたでしょう。男は私にソファーに座るように促しますが私は立ったままでいいと答えました。言うまでもなくソファーに埃が積もっていたからです。男は無表情で「あんたが川口さん？」とだるそうに言いました。「はい」と私は緊張した声で

答えます。

「ふーん……」

男は書類らしき物に目を落としたあとに私に視線を移しました。あまりにもじつと見つめてくるものですから私は思わず目を逸らしてしまいます。男が立ち上がります。長い髪が揺れて少しだけ見えた顔立ちは悪くないものでした。むしろ整っていると言っていい部類です。腕には鎖のついた三本の口ザリオが提げられていて私はここが悪魔払い探偵事務所であることを思い出します。どうでもいいことですが男の背丈はあまり高くありません。

男は自分がこの悪魔払い探偵事務所の所長であることと、他に従業員が存在しないこと。名前が赤山慎吾であることを明かしました。赤山……？ その名前がどこかで引かかりましたが私には思い出すことが出来ませんでした。まあどうせいつかのテレビニュースで同じ名前を見た程度でしょう。私の部屋にはテレビがないので実家にいたころということになります。

促すような目で見られて私は緊張しながら自己紹介をしました。

私は自分が何を喋ったのか覚えていません。なにせ社会不適合者に片足を突っ込んだような生き方をしてきたものですから何を話しているのかわからずにしどろもどろになってしまいました。赤山慎吾はなんだか興味なさ気な顔をしています。沈黙が辛いです。私はなんだか真っ白になりながら訊ねました。

「あの、悪魔って本当にいるのですか？」

それはある程度好奇心から出た発言だったのでしょうか。

私は星占いが好きでしたし、神話関連の読み物なども好きでした。無論、その実在を信じられるほど私は無垢でも純粹でもありません。しかし一方で天使や悪魔とは「いたらないのにな」と一条の希望を射す存在でもあったのです。ですので私はこの胡散臭い探偵事務所の看板を見たときもわずかながら心を躍らせていたのです。

「は？ 悪魔なんかいるわけねーだろ」

赤山慎吾のそれは失笑でした。なにいつてんだこいつバツカじゃ

ねーの臭を隠そうともしない物言いでした。堪忍袋の緒が切れまして。コツコツと足音を鳴らして私は赤山慎吾に近づきます。

「……なんだ？」

私は赤山慎吾をぶん殴りました。

床で呆けている赤山慎吾に背を向けて私は事務所を飛び出します。階段を駆け下りて、日差しのきつい雑居ビルの前で座り込みました。「やってしまった……」

膝を抱えて一分ほど座り込み、私は叔父から貰った地図を頼りに学生寮に戻りました。

叔父になんて言い訳すればいいでしょう？ 私は生来短気な性格なのですが叔父はそれを知りません。否、叔父のような立派な人にそれを知られたくはありません。滅多にならない私の携帯電話が鳴ったのは、うあー、と一人唸っていた時でしたので私は床から三センチほど飛び上がりました。液晶画面に映るのは知らない番号です。私は恐る恐る電話に出ました。

「お前さ、初対面の人を殴り飛ばしてはいけませんとか親に教わらなかったわけ？」

「っ……」

その声は赤山慎吾のものでした。叔父から番号を聞いていたのでしよう。

「まあいいや、用件だけ伝えておく。働く気があるなら明日の午後一時から事務所にきてくれ。以上」

ぷつん、と通話が切れしました。……どうしましょう。いえ、考えるまでもない気がします。他に面接を受けるのも面倒ですし、そもそも社会不適合者に片足を突っ込んだ私のようなものを雇ってくれるとも思いません。

ともかくその日、私は眠れない夜を過ごしました。

私は鏡という物が非常に嫌いです。ああ、あの銀の皮膜に映る自

分の顔を何度呪ったことでしょう。鏡よ鏡よ鏡さん、なぜ私は世界で一番美しくないのでしょうか。もしも私が美しければ私はこんなに自信をなくしてびくびくと引きこもることもなく、堂々と町へ出て男を引つ掛け、思う存分逆ヒモ生活を楽しむことが出来たでしょうに。悪魔払い探偵事務所などという如何わしい職場で働かずとも朝は寝て昼は寝て夜は寝る生活を延々と繰り返すことが出来たでしょうに。

無論そんなモノが単なる妄想の産物であることなど私は承知しています。美人には美人なりの悩みがあるのでしょうか。不美人の権化たる私に言わせれば贅沢な悩みが。

「はあ」

時刻は十二時三十三分、私は口元に出来た大きなニキビと格闘し、ついに勝利することを諦めました。外に出ると夕方と違って日差しが強く辟易します。半ば無意識に口元に手をやります。昨日は焦っていたのかあまり気にならなかったのですが、赤いそれを撫でて私はもう一度ため息を吐きます。アスファルトが照り返す熱気に私は挫けそうになります。ええ、元々根性なしの引きこもりですから。それでもどうにか例の雑居ビルに到達することが出来ました。

「よう」

赤山慎吾（以下所長と呼ぶことにします。）は文庫本から視線を上げて片手を挙げました。私はこんにちはと言おうかおはようございますと言おうか悩んでいる間に所長の視線は文庫本に戻ってしまいました。私という生き物はなぜこうもグズなのでしょう。

「あ、仕事の説明しないとな」

思い出したように所長が顔を上げます。

「所長」

「ん？」

「こんにちは」

所長は少し不思議そうな顔をした後に「おう、こんにちは」と笑みを見せてくれました。……意外にいい人なのかもしれません。

「仕事の説明だけど、依頼があつたときはまた別で指示だがとりあえずは掃除頼むわ、用具は左の……、そっち視点だと右の部屋にあるから」

……言つたきり自分は文庫本に戻ってしまいました。私は右の部屋を開けました。狭いですが流し台とコンロがあります。あまり使われていないらしくお湯の満ちたポットと傍らのインスタントのコーヒー豆以外には何もありませんでした。よくみるとあちこちが薄く黴ています。掃除用具はどこでしょう？

「ああ」

私より少し高い位置に棚がありました。ここでしょう。手を伸ばします。なかなか開きません。「んんっ」少し力をこめると「ひゃあ!？」開いたことは開いたのですが同時に雑巾やタオルなどの山が頭の上に降り注ぎました。

「どーしたー？」

間延びした声が隣室から聞こえます。なんとなく悔しかったので私は「なんでもありません!」と怒鳴り返しました。

私は掃除します。手始めにソファとテーブルをピカピカに磨き上げました。私はキレイ好きな人間でしたので掃除そのものは特に苦ではありませんでした。Gも出ませんでした。しかしです。私はあまり心の広い人間ではありません。所長は「あ、終わった?」なら次は床な!」などと手伝いもせずに私の淹れたコーヒーを不思議そうな顔をして啜っています。文庫本を片手に偉そうなことを吐かされるのはどうも気に食いません。彼は雇い主ですのでそれくらいは我慢すべきでしょう。私が悪魔払い探偵事務所に勤めだして三日経ち、室内は概ねピカピカと呼べるようになりました。そんなときに彼は言いました。

「ついでだから台所もやつといて!」

……台所は二日目に終えています。目線すら上げずに言つた言葉でした。私はいままでの自分の働きが全て無意味だったような感覚に囚われました。

「所長、台所は既に終えています」

「んー、なんか言ったか？」

私は所長をぶん殴りました。

ついに掴み合いの喧嘩にまで発展してします。といっても所長は腕っ節の方はさほど強くないらしく私が一方的にボコボコにするのみです。事務所のドアが開いたのはそんなときでした。

「……あ」

私たちは二人揃ってそんな間の抜けた声を出し、「……」依頼人はゆっくりと音を立てないようにドアを閉めました。

「川口、捕まえろ！」

「え？ えっと？」

「ああ、もう！」

所長は私の襟首を離す（所長に襟首を掴まれたまま私がボコつていた）とドアから飛び出していつて女の子を半ば強引に捕獲してソファーに座らせました。自分はその向かいに座ります。所長の目線を受けて私はマニキュアルを思い出し、お茶を汲みに行きます。安物のパックのお茶の葉を陶器製のコップに出してお湯をいれます。いい色になったので抜いて盆に載せ、買い置きのお菓子を添えました。ちなみにお茶菓子もお茶の葉も私が買ってきた物です。私がいなければ客人にお茶をお出しすることもできなかったでしょう。まったく恐ろしいことです。

応接間のテーブルに戻りお茶とお菓子を彼女の前に置いて所長の隣に座りました。私は彼女を見ます。彼女は同姓の私からしてもかわいらしい外見をしていました。肩のはだけたシャツを着ていますが、上には薄いベストを羽織り、下はジーンズで下品でない色香に留まっています。セミロングの黒髪は少しも痛んだところがなく彼女の穏やかそうな顔立ちにとてもよく似合っていました。

彼女はお茶を一口啜り、一息つくところを訊ねてきた理由をゆっくりと話し始めました。

「私は桜美坂高校の三年の宮部優子といいます。バレーボール部に所属していてレギュラー。だけど他の部員とは仲がいいほうだと思います。……両親は共働きですが家族仲はよくて晩御飯は揃って食べます」

そこで少し言い淀んだのが気になりました。

「私がここを訪れる切っ掛けとなった出来事が起こったのは一昨日のことです。何かが私の部屋に入ったようなのです。何か盗られた訳ではありません。ですが私の日記が見られた形跡があったのです。最初は母かと思い、母を問い詰めたのですが、母は知らないといいます。母は嘘をつくのが苦手な人間ですから言い逃れをするのも変だなと思って、ふと気づいたんです。私の部屋には鍵が掛かるようになっていんです。そして私は帰宅して鍵を開けました。勘違いではありません。私は日記を親に見られたくないため習慣として鍵を閉めるんです。そして私は部活を終えて帰宅し確かに部屋の鍵を開けたんです。鍵は私が持っているだけで合鍵はありません。わかりますか？ 誰かは扉をすり抜けて部屋に入ったとは思えないんです。」

これが私がこの悪魔払い探偵事務所を訪ねた理由です」

というようなことを彼女は言いました。私はなるべく要点を纏めて彼女の発言を記録します。小・中学校では生徒会で書記を務めていたのでこの手の作業は苦手ではありません。

しかし日記を見られた形跡というのはどういうものでしょう？

ページの捲れ？ 汚れ？ 折れ目？ どれも微妙な物です。彼女の勘違いではないか、というのが第一印象でした。

「とにかく、一度部屋を見せていただいてもよろしいですか？」

彼女は頷きました。

一階の車庫が開きました。所長は車の運転が出来るようです。現れたのは叔父のそれよりも更に古そうな物です。彼女は自転車でしたので後部座席に無理矢理積み込みます。かなり強引に見えました

が、やってやれないことはないんだなあとは感心しました。彼女を助手席に乗せます。

「いつてらっしゃいませ」

「は？ なに言ってるんだ？ あんたも行くに決まってるだろ」

「は、え？ きゃあああ」

私は自転車の積まれた後部座席に放り込まれました。……せ、狭いです。そのまま車は走り出します。揺れと同時に頬に車輪が当たります。私は依頼人と別れたら先ず所長をぶん殴ってやろうと決意しました。ところで私は叔父の車がそうだったように古い車というのは煙草の匂いにするものだと思うのですが、所長の車が例外なのか私の考えが偏見なのか、煙草の匂いはしませんでした。

彼女の家は車で三十分程行ったところにありました。自転車で来るのは大変だったでしょう。途中に花屋があつてそこに明るい髪の女性が水をやっています。道中で私は今の桜美坂について彼女に訊ねます。何を隠そう私も桜美坂の出なのです。彼女の受け答えは微妙にぎこちなかった気がしました。到着し、私は自転車を引っ張り出します。依頼人はともかく所長すら手伝ってくれません。絶対ぶん殴ってやります。

「……ふう」

彼女の家は一戸建てでセンスのいい外観をしております。きっとお金持ちなんだろうなと思わせる迫力があります。彼女が先に入り、事情を説明し、所長がそれに続けました。私は家の前で待つことに「ぐえ」所長に服を引っ掴まれて引き摺り込まれました。

家に入ると彼女の母親らしき人物に「お世話を掛けます」と頭を下げられました。母親もきれいな黒髪をしています。遺伝なのでしょう。まったく羨ましい限りです。

「こつちです」

二階にある彼女の部屋に案内されました。年頃の女の子らしくベツドにぬいぐるみなどが飾ってあります。勉強机には教科書が開いたままになっていました。数学でしょうか。私も高二から高三に掛

けての数学には苦戦したものです。

「その日記というのは？」

彼女は勉強机の左側の引き出しを幾つかの手順を踏んで開けました。複雑な手順で私などでは一度見ただけでは再現することはできないでしょう。ちなみに彼女はこれをデ。ノートを読んで思いついたそうです。

「手順を踏まずに開けるとどうなるのですか？」

「警報が鳴ります」

簡潔で明瞭な答えでした。しかしそれでは誰も家にいない時間にはほぼ無防備ということですよ。

「ふーん……」

所長は突然床に座り込んで唸ります。私は所長の右手が彼女から死角となっている机の陰で何かを握りこんだのを見逃しませんでした。手がポケットに一瞬だけ消えました。

立ち上がって、所長は言います。

「これからあなたに幾つか質問をします。出来るだけ正直に答えていただけると助かります。答えたくないものは答えたくないで構いません」

彼女は頷きました。所長の質問と彼女の回答は以下のようなものでした。

「現在お付き合いしている方はいますか？」

「いいえ」

「誰かに恨まれるような記憶はありますか？」

「いいえ。しかし断言は出来ません。意識せずに恨みを買ったことはないとは言いません」

「金縛りにあったことはありますか？」

「いいえ」

「この部屋の鍵を失くしたことはありますか？」

「いいえ」

「鍵を見せていただけますか？」

「はい。どうぞ」

「どうも。お返しします。この鍵を二、三日使わなかったことはありますか？」

「はい。お盆休みの間は使いませんでした」

「最近古いアクセサリーなどを買ったりしませんでしたか？」

「いいえ」

「もしよければ日記を見せていただけますか？」

「ごめんなさい。あれは誰にも見せる訳にはいかないんです」

「そうですか。いえ、失礼しました。それからこれはあまり関係ないのですが、警察には連絡していいのですか？」

「はい。警察と関わったことが受験に影響したりするといけないからと、父が」

「質問は以上です。お手数かけさせて申し訳ないです」

彼女は迷うような表情を見せました。

「私はいま混乱しています。鍵をすり抜けるなんてことが人に出るとは思いませんが、冷静に考えてみれば人以外が私の日記なんてものに興味を持つでしょうか。それに私は元々幽霊や悪魔の存在には懐疑的です。」

人の仕業なのか、それともそれ以外の仕業なのか、半ば勢いであなた方『悪魔払い探偵事務所』に依頼しましたが人以外の仕業というのも考え辛いです。きちんと教えていただけますか？ これは人がやったことなのでしょう、それとも人以外がやったことなのでしょうか？」

アホ所長は困った顔をしてポリポリと頭を掻きました。

「実の所、僕にもよくわからないのですよ」

一拍置いて所長は続けます。

「もしかしたら人外かもしれません。そうだとしたら使い魔というやつです。これは力が弱くて気配が薄い。少なくともあなたが室内にいる内は人外が入ってくるようなことはないでしょう。ですからとりあえずいまはご自宅を留守にしないほうがいいと思います。な

に。二、三日の辛抱です。週が変わるまでには僕が終わらせてさしあげますよ」

所長は私には一度も見せなかった感じのいい笑顔を作ります。私たちが部屋を出るのを追おうとした彼女に「ここで結構です、いまはなるべく部屋を留守にしないことを心掛けてください」と言い、部屋を出ました。一階に降りて彼女の母親に少し質問をします。所長が訊いたのは「誰がどの時間に家にいるか」です。八時に父親が仕事に、十時に母親がパートに、一時に彼女が部活に出て家が空になり、午後の四時に母親、六時に彼女、八時から九時に父親が帰宅するそうです。何に使うのかは知りませんが一家揃った写真を借りられるか？ と訊ね、彼女の母親は快く庭で撮ったらしき三人で映っている写真を貸してくれました。礼を言って家を出ます。所長は私を乗せずに車を出しました。「しょ、所長！？」私の悲鳴などものともせずにバンパーが遠ざかります。なんの冗談でしょう……？ 私は小動物の如く首を振って自体の把握に努めます。……理解不能でした。

私が途方に暮れ始めた辺りで所長が徒歩で戻って参りました。とりあえず一発殴ることにします。あ、行きの件でもう一発追加しなければならぬことを忘れていました。「もう、お前、解雇……」切れ切れに何か言いましたが私には全然まったく聞こえません。

所長は彼女の家の隣のベルを鳴らしました。

「？」

意図が読めません。ともかく出てきたのは人の良さそうなお婆さんでした。所長も人の良さそうな笑みを浮かべてお婆さんと話しています…… って、よくよく考えればなぜその笑みは私に一度も向かないのですか！ あんな嘘くさい笑みなど向けられたい訳ではありませんが。

所長が戻ってきます。

「何を話していたのですか？」

「世間話、と一昨日騒音が無かったか」

……彼女の部屋のベルことですか。

「あつたつてさ」

言いながら歩きます。少し遠い位置に車が路上駐車していました。

「えーつと？」

「家の前にいつまでも停めてたら目立つだろ」

……理に叶ってはいますが私を置き去りにする意味はあつたのでしょうか。

今度はきちんと助手席に乗り込みました。フロントガラスに町並みが映ります。きちんと舗装された美しい道路です。自転車に詰め込まれてよく見えていませんでしたがこの辺りは高級住宅街のようです。

「……共働きなんだよな」

何気なく所長が呟きました。

「彼女の両親のことですか？」

「ああ、見たところ経済的な余裕はありそうだろ？　なんで奥さんも働いてるんだろうな」

言われてみればなるほどそうかも知れません。私は視線を上げました。考え事をする時の癖です。しかし結局「働きたいからじゃないですかね」という平凡な答えしか思いつきませんでした。

「働きたいから？」

「はい。うちも共働きなのですが、家でじっとしているのが性に合わないんだ、って母が言っていました」

所長は下唇と顎に手を当てて黙ります。なんというか格好をつけた仕草ですが所長がやると堂に入って見えるのが、ム力つきました。「そついうもんか」

所長は顎から手を離しました。

「先ず高校のバレー部から当たってみたいんだが、お前、卒業生だよな？」

「そうですね……　ちなみになぜバレー部からなんですか？」

「依頼人が疑ってたから。気づかなかったか？　彼女、バレー部と

親のことは話したが自分のクラスのことは話さなかったぜ」

「あ……」

「人間が何か始めるには切っ掛けが必要なが多い。切っ掛けがなきゃ心の中でゴーサインが切れないんだ。友達と一緒に道を歩いてて向かいからきた自転車が通り過ぎると同時に話しかけたりとかあるだろ？」

「つまり」

「バレエ部か親の関連で何かあったんじゃないか、ってこと」

どうやら所長は性格のほうはともかく頭の切れる人ではあるようです。

「じゃ、お前行ってこい」

「へ？」

「桜美坂のバレエ部でいろいろ訊いてこい。後輩とか顧問とか、ツテを辿れば親しいやつくらいいるだろ。なるべく被害者の依頼だつてバレないようにな。あと、」

「無理です……」

「大丈夫、出来る！」

叔父と同じ事を言わないでください……

「あの、やらないんじゃないかって、出来ないんです」

「あ？　なんでだ？」

「高校時代の私には友達と呼べるような相手はほとんどいなかったんです……　先生から見捨てられて、こっちの大学入った時はめちゃめちゃ驚かれました」

車内を気まずい沈黙が冷やします。

「……その、なんというか、すまん」

「せめて謝らないでください！　めちゃくちゃ惨めです」

私は所長をぶん殴りましたが放った拳には力が入っていませんでした。

事務所に戻ると所長は分厚いタウンページを引っ張り出しました。

私は右にある狭い台所に入りコーヒーを淹れます。ミルクも砂糖も入れています。カップを手に応接間に戻り所長の隣に置きます。所長は半分だけ目線を上げて「サンキュ」といいました。捲る手は止まっています。もう片方がコーヒーに伸びます。「ん」不思議そうな顔をするのがかなりムカつきました。

「……うん」

幾つかの住所を書き出して所長はタウンページを閉じました。

「行くぞ」

「はい」

人使いが荒いのはいまに始まったことではないので黙って従う事にします。私と所長は車に乗り込みます。

「あ」

ふと思い出したことを訊いてみようと思いました。

「所長、彼女の部屋で所長が何かを拾ったと思うんですがあれは何をしたんですか」

「へえ、よく見てたな」

所長はポケットをひっくり返しました。

「これは……、髪の毛ですか？」

それは女性のものらしい長い茶色の髪の毛でした。こんな小さなものをよく見つけたものです。彼女は黒髪です。彼女のものではありません。また母親のものでもありません。つまりはこの髪の毛の持ち主が犯人なのでしょうか？ それは少々短慮かとも思いますが。

「十中八九、これの持ち主が犯人だろう」

あれ？

「しかし所長、彼女は高校生です。茶髪の友人の一人や二人は居ても当然ではないでしょうか」

「いいや」

所長があくびをします。

「彼女は日記のことについてはひどく神経質だった。部屋に鍵かけてその上にまだロックしてるんだぜ？ 友達を部屋に呼んで、もし

トイレに行きたくなったら？ 何か用事で一階から親に呼ばれたら？ 実際本人の留守中にそんなことをする人間はまあいない。だが疑心暗鬼は増大するんだ。万に一つの可能性は本人にとっては百パーセント起こることなのさ」

その言葉にはなんだか説得力がありました。けれど説得力なんてものは適当な理屈と自信に満ちた口調を組み合わせただけで生産できることを私は知っているのです。年頃の少女が友達を家に誘うのはそんなに理屈をつけて否定するようなことでしょうか？

所長は住所と地図を照らし合わせながらゆっくり進んでいきます。私はこの人はきつと切れすぎるんだろうなあと思います。しかし人間のクズです。この世の全ては確かに理屈で作られています。ですがその理屈の大半は私たちに理解できないものであることを彼は知りません。

「……」

私は益々この所長が嫌いになりました。

「どうした？」

「いえ、何も」

そのうち所長は車を止めました。そこには一軒の古い鍵屋がありました。所長は古いドアを開けて初老くらいの店主に訊ねます。

「こちらは盆に店を開けていましたか？」

「いいや、店主は答えました。そうですか、失礼しました。あっさりと所長は頭を下げて引き下がります。

それから数件同じことを繰り返したので省略します。盆に店を開けていたと答えた者には何かを見せました。所長は私がそれを覗き込む前に仕舞ってしまうので私はそれをきちんと見ることが出来ません。

「どうして私には見せてくれないのですか？」

「お前が焦れてるのがおもしろいから」

私は所長をぶん殴りました。

次の鍵屋で所長は手掛かりを掴みました。突然所長が泣き落とし

に掛かったので私は何かと思います。所長は恋人の形見が盗まれたとか人情を刺激するようなことを適当に吹いて店主から所長が当たりをつけたらしい人物がその鍵屋を訪れたらしいことを聞き出してしまいました。

「所長、所長は探偵なのに格好よくないですね」

「あとは茶髪の女のことが。学校つてのは調べ難いんだよなあ」

所長はあっさりと私の皮肉を無視します。

「どっかの誰かに高校時代の後輩だか友達だかがいれば手っ取り早かったんだが」

……無視ではありませんでした。ただそれ以上に有効な皮肉を吐いてきました。口喧嘩では分が悪いとみた私は所長をぶん殴りました。

「っ…… お前なあ」

「所長は、なぜあきらかに儲からない探偵事務所などやっているのですか？」

所長は溜め息を吐きました。所長はそこに律儀な性格ですから自分の言いたいことよりも相手の問いに対する回答を優先することを私は予想していました。ふっふっふ。

「俺は金持ちなんだよ」

「なんですと？」

貧乏人のサガでしょうか。金持ちを見ると無条件でムカついてしまいます。

「別に働く必要がないから、なんか特殊なことやろうと思ったわけ。それが探偵」

なんだか私は強烈な違和感を抱きました。特殊、という言葉に過剰反応したのかもしれませんが。私は凡人です。いや、下の方には飛び抜けているかもしれませぬ。上を見ることにどこかで諦めてしまった人間です。

「……」

「いまあるカードだけで、勝負してみるか」

所長が公園の脇に車を止めた頃には夕刻を過ぎていました。陽射しも柔らかくなり、冷房の効いた車内からでたばかりの私たちを心地いい熱気が温めます。

待ち伏せするために、私達は公園のベンチで落ちかけた太陽の真っ赤な輝きを見つめていました。相手が所長でなければ吊り橋効果に近い心情で恋に落ちてしまいそうな光景です。何故か故意に落とす、という漢字が浮かんできて昼ドラにありそうな崖から人間を突き落とす場面が連想されました。そのほうが所長に似合っていたからです。顔を隠して少し笑います。

「……ひまだな」

「……ひまですね」

五分が経ちました。

「来ませんね、所長」

「ああ、来ないな」

十分が経ちました。

「えいつ」

「わっ、お前、何を、やめ、」

「よいではないか、よいではないか」

「いいわけ、ある、か、あっ……」

「……所長、いまの『あっ』、すごく気持ち悪いです」

「……すまん。いま深刻に自己嫌悪してたところだ」

三十分経過。

「ゲームでもしましょうか」

「思い立つのが随分遅かったな」

お互いに一から順に数字を数えていき三十を言ったほうが負け。一度に言える数字は三つまで、というゲームをしました。

私からだったので「一」と言いました。実はこれで勝ちなんですよね、このゲーム。というのも相手にも三十を言わせるためには二十九を取る必要があり二十九を取るためには二十五を取る必要があり二十五を取るためには……、とこれを繰り返していくと五を

取るために一を取ったほうが勝つのです。

「二十九」

と私は言います。

「三十、俺の負けだな」

まだまだ勝負はこれから、という顔です。

ちなみにこれから私が十三回勝って所長はようやくこの力クりに気づきました。というのも所長は法則を理解していませんから適当な数字を言うため、私が数字をズラしても最終的に私が勝つように調整できるのです。所長がようやく法則を理解した時、私は腹を抱えてゲラゲラと下品に所長を笑いました。逆だったら私は所長をぶん殴っていたでしょう。しかし私は私などに謀られて悔しげな所長の顔を見るのが楽しくて仕方ありません。

一時間が経ち、待ち人がやって参りました。所長が悔しそうな表情を押し殺して彼の前に立ちます。私も笑みを噛み殺しました。思出し笑いしそうになるのを必死に堪えます。最低でも所長から見えないように一歩半ほど斜め後ろに立ちました。

「初めまして、宮部一雄さん。僕たちは娘さんに雇われた探偵事務所の方です。少しお時間を頂けますか？」

「ああ、あなた方が……構いませんが十分以内にして頂きたい」
所長が目をつけたのは彼女の父親でした。私はふと時計を見ます。
八時丁度でした。

「はつきり言つて、一雄さん。娘さんの日記を見たのはあなただと僕は考えています」

「私が？」

「はい。僕が引つ掛かったのはあなたが娘さんに『警察に関わったことが受験に影響したりするといけない』と言ったことです。別に娘さんが何か悪いことをした訳ではないのですから幾分穿ちすぎではないか、と考えました。そして娘さんの部屋に入るにはどう考えても合鍵が必要になります。彼女が鍵を手放した可能性があるのは部活動がなかった盆休みだけです。厳密に言えば部活動の最中など

は彼女の目の届かない場所にあるでしょうが、合鍵を作るまでに彼女が手元がないことに気づかないはずがないのでこちらは除外します」

「こんなことは言いたくありませんが、私とほぼ同じ条件の家内はどうなのですか」

「娘さんは『母は嘘が得意ではない』と言いました。僕はその言葉を信じます」

「……わかりました。私は娘の部屋になど入っていませんがお話をお聞きます」

「そうです。あなたは確かに娘さんの部屋には入っていない」

「……」

ほんのわずかな時間です。一拍置いた所長の顔つきがなぜか私の目には悪魔のように映りました。私がまばたきをしたら消えていたのできつとそれは気のせいだったでしょう。所長が言葉を続けます。

「あなたにとって誤算だったのは鍵の複製に時間が掛かったことでしょう。僕が見たところあの鍵は少し特殊でした。インターネットで調べた程度の知識しかないあなたには鍵の複製は直ぐに終わるものだと思っていた。ですが実際は複製には丸一日ほどかかった。盆の休みは明けてしまい、あなたは娘さんの部屋に入り損ねた。盆以外は？ あなたは朝早くから出勤し夜は八時から九時になって帰宅するどちらの時間にも娘さんかあなたの奥さんが家にいることになります。」

ともかくあなたは合鍵を作りました。理由はやはり日記を見たことからでしょうか。それともあなた自身が誰かに依頼されたからかもしれません。僕はその可能性は高くないと考えています。

いずれにしろ僕には詳しい事情はわかりません。

同僚の娘と比べて大人しすぎる娘さんが親に隠れて何かやっているのではないかと不安に思ったのかも知れませんが、あなたがたまの休みに援助交際している茶髪の女と歩いている所を目撃されたの

かも知れない。勿論まったく違う理由からかも知れません。

これはあくまでも推測です。気を悪くしないでください」

「……」

「あなたは合鍵と家の鍵を茶髪の女に預けて日記の中身を報せるように幾らかのお金を渡しました。茶髪の女はおそらく携帯電話がデジタルカメラに日記の内容を写してプリントしたのでしょう。あなたはそれを受け取った。これだとあなた自身が部屋に入らずとも日記の中身を知ることができる」

「……確かにあなたの推測にはある程度の筋が通っているように聞こえます。しかし、」

「証拠ですか？ この写真、とある鍵屋に見せたら確かに盆休みの内にここに来たと証言してくれましたが」

一雄さんは目を瞑りました。鍵屋を利用したのはどこか別の場所の鍵を複製するためであると言おうとしているのかも知れませんが、もしもそれを主張するにはこの間は不自然です。一分程沈黙します。やがて一雄さんは言いました。

「はい。合鍵を作ったのは私です」

「好奇心から訊ねますが、その理由はなんですか？」

「あなたに答えることはできません」

「そうですか。失礼しました」

「娘に謝ろうと思います」

「いえ、その必要はありません。あなたは即刻合鍵を処分してください。それ以外のことは何もしないでくださいそれが最善の解決策です」

「どうしてですか？」

「数日の内にわかると思います。それが内の事務所のやり方なのです。ただしあなたがもし合鍵を処分しなかった場合、僕たちはあらゆる手段を用いてあなたを破滅させます。必ず破滅させます。いいですか。必ずです。肝に銘じて置いてください」

「わかりました」

所長は「それでは僕たちはこれで失礼します」と言って彼に背を向けました。

「一つだけよろしいですか？」

一雄さんが言います。

「あなたのお名前は？」

所長が振り返ります。

「赤山慎吾といます」

「赤山さん、あの子は母親に似ました。疑り深い癖に嘘が苦手なのです」

「知っています」

所長はなぜか笑みを見せました。今度こそ歩き出し、私たちは車に戻ります。私はふと腕時計を見ました。八時十分丁度を指していました。

「……所長」

私は事務所に戻る車の中で言いました。

「なぜ宮部一雄を優子さんに謝罪させなかったのですか？ 私には理解できません」

「嫌なんだよ」と所長は言います。

「見合う以上の報復を人は望むだろ。俺にはそれが嫌なんだ」

やはり私には何がなんだかよくわかりません。ともかく私たちは事務所に戻りました。所長は私が淹れたコーヒーを一口啜って不思議そうな顔をしたあとに「帰っていいぞ。今日の分は残業代だしとく」と言いました。私は頷いて、暗い路地を歩きます。なんだかモヤモヤした感情が渦を巻いていました。帰り道にあるコンビニによって甘いものを買いました。甘いものを食べながらイライラするのは難しいと言います。外に出て何気なく夜空を見上げると、欠け具合からか半分はキレイなのに半分は不気味な色をした月が私を見下ろしていました。半身は天使で半身は悪魔の得体の知れない何かが

微笑んでいるように見えました。私は学生寮に戻ると買ってきた甘いものを食べ、お風呂に入って歯を磨くと直ぐに眠りました。夢は見ませんでした。私は睡眠時間が長い方ですがアルバイトに時間を割いているせいでこのところ少し疲れていたのかもしれませんが。深く、心地いい眠りでした。

翌朝、十時頃に目を覚ましました。寝汗を少しかいていたのでシャワーを浴びて一緒に歯を磨きます。体を拭いて下着をつけました。朝とはいえ夏は暑いものです。出勤はもう少し先なので無料ゲームでもしようかと思い、携帯電話を開くとメールが来ています。どうせ広告か何かだろうなと思いつつも中身のわからないものというのは気になってしまいます。メールボックスを開くと差出人にはアホ所長とありました。内容は「起きたらなるべく早く事務所にこい」でした。絵文字のない簡潔なメールです。しぶしぶ私はいつも着ている三枚千円で投売りされていた服を着て簡単に化粧をし、学生寮を出ました。舗装されたアスファルトが照り返す陽射しには少なからずつんざります。私は免許を取る気のない人間ですから道路とか土でいいのにかと思ってしまいます。たった十分の道のりが遠いです。

探偵事務所についた頃には薄く汗が滲んでおりました。軽くふき取りながらドアを開けます。所長はデスクに突っ伏してグースカと眠っておりまして。顔は見えません。私は所長をぶん殴りました。炎天下の中に人を呼び出しておいて勝手な男です。上体を起こして所長は私を睨みます。

「もうちょいさ、起こし方とか他にないのか……？」
「ありません」

所長は呆れたのか諦めたのか、ため息を吐いたあとに「宮部優子に会うぞ」と言いました。車に乗って片道三十分の道を行います。所長の車はクーラーが効き始めるのが遅いです。

この時間は彼女の両親が働きに出ていて彼女しか居ません。私たちは三十分の間、ほぼ無言でした。ただ所長は彼女の家の前までき

た時に「余計なことは言うなよ」とだけ釘をさしてきました。私は頷きます。ベルを鳴らすと彼女が出ました。事前に連絡をいれていたのか驚いた様子はありません。

「こんにちは」

「どうも、こんにちは」

彼女に迎えられて私たちは二階にある彼女の部屋に向かいます。

所長はそこで「あなたの部屋に入ったのは悪魔の類だったようです。ご安心ください。もうここに現れることはありません」と言いました。は？ と私は思いますが表情には出さないように努めます。優子さんは怪訝そうな顔をします。

「あなたが最初に仰ったように悪魔がやったなど疑わしいとあなたは考えるでしょう。なのでお代は結構です」

「ちよつと待つてください」

優子さんが大きな声を出しました。

「私の部屋に入ったのは父ではないのですか？」

「はい。僕たちは人間に対しては出来る限りの調査をしましたが、その可能性はありません」

所長のポーカーフェイスは見事なものでした。私は脇に立っているだけなのでなんとか誤魔化せますが、面と向かって問われたら隠し切る自信がありません。

所長は「鍵をすり抜けることは人間にはできませんよ」などを自信に満ちた口調で言い、説得力を生産します。彼女はまだ疑っているようでしたが、所長の説得は強く少しづつ表情を和らげていきます。

「万に一つにも同じ被害に遭わないためにこのロザリオをお持ちください。きつとあなたを守ってくれます」

所長は鎖のついたロザリオを一つ外し、彼女に握らせました。

「……」

彼女は手の中のそれをじっと見つめて首を一度、縦に振りました。「っと、忘れるところでした。これをお母様に返しておいていただ

けますか？」

所長は写真をバックから取り出し彼女に渡します。裏面に結婚記念日とあり、裏面に書かれたその日付は今日から一週間後でした。

帰りの車の中で私はふと考えます。

所長がもし彼女に父親がやったことを打ち明ければ彼女は憎しみのままに父親の浮気が書かれているかもしれない日記の中身を暴露するかもしれません。穏やかそうに見えた彼女の家庭は崩壊するかもしれません。全ては悪魔の仕業だった。所長がそれを払った。それで丸く収まったのでしょうか？ 彼女の父親は罰を受ける必要はなかったのでしょうか？

不意に車が止まりました。

「所長？」

「別に俺としては来る気はなかったんだが、お前がすっかりしなさそうだからな」

道路の端に車を停めて所長は降りました。私もそれに釣られます。

花屋？

「こんにちは、キレイな花ですね」

店先で水をやっていた女の人に声を掛けます。

「ありがとうございます。みんないい子達ですよ」

その女性は明るい茶髪でした。

この人が？ 私は反射的に思います。

「あれ、そういえばあなた…… この間、宮部さんと歩いてませんでしたか？」

率直な切り出しでした。

「ええ、花言葉のことを訊かれました」

「……花言葉？」

「はい。店先で幾つかお話したのですが、もっと詳しいことを訊きたいと仰られたのでその喫茶店で。なんでも奥様にプレゼントする品らしいですよ」

「しかし、いくら内密にことを進めたいからって、娘さんが気づい

ていないか確かめるただけに部屋に無断侵入するのはやりすぎだ
と思いますよ。既婚者を相手に下心を出すのもよくないですねー」

「え……？」

私は啞然とします。女性も啞然とします。

「ガーベラはありますか？」

「あ、はい」

茶髪の女性は手際よく準備をして鉢植えを所長に渡します。

「ありがとうございます」

「こちらこそ」

所長はお金を払って車に戻りました。

「やるよ」

ガーベラを私に渡します。

「……花言葉はなんですか？」

「お、鋭いな」

所長は少し笑みを見せます。

「希望、常に前進、だったかな？」

……耳の痛い言葉です。また皮肉屋の所長らしい言葉だな、とも
思いました

「戻るか」

「はい」

大安売りな天使

人の少ない時間のほうが好ましいと考えた私は始発電車に乗りました。地元までは二時間くらいでしょうか。定期券を買って電車で学校に通っていた高校時代をふと懐かしく思います。

悪魔払い探偵事務所で私に取って最初の事件が解決して一週間が経ちましたが、あれ以来事務所には閑古鳥が鳴いていました。私が依頼というやつはどれくらいの周期でくるのか尋ねると所長は「二、三ヶ月くらいは何もなかった時もあつたな」と軽く言います。「所長、ひまです！」一度、言ったことがあるのですがどうでもいい仕事を山のように押し付けられて以来私の中でそれは禁句となっています。ちなみの通常業務は所長が留守の時の電話番号と部屋の掃除。所長のコピーの買出し、その他諸々、つまり雑用です。ビラ配りをやらされそうになった時は全力で拒否しました。知らない人に積極的に話し掛けて笑顔を見せるなんて芸当が私に出来るはずがありません。……自分で言うのもなんですが私はなぜクビになっていないのでしょうか？

とりあえず事務所には大した仕事は残っておらず暇でした。夏休み中に一度くらいは親元へ顔を見せに行こうと考えていたのを所長に話した所、あっさりと三日の休暇を貰うことが出来ました。

「電車の中というのは相変わらず退屈ですね」

あまりにも人がいないので独り言がこぼれます。ふあーあ、なんだか眠くなってきました。朝は得意ではありません。どうせ終点とはいえ私はひどく間の抜けた性格ですので努力して起きておくことにします。うう……ぐー…… 駅員さんに肩を揺すられて私は目を覚ましました。口元まで涎が垂れていました。は、恥ずかしい…… 乙女にあるまじき姿です。駅員さんをぶん殴って記憶を消去しようかと考えましたが流石に自粛します。

それから二本の電車を乗り継いで私は故郷の土を踏みました。田畑の残る田舎の空気はあざやかです。懐かしい風が私の中に残る都会の残暑を吹き飛ばします。何もかもが澄んでいました。時間がゆっくり流れているようです。何もない田舎ですが私は故郷が好きらしいです。大学を出て、もしも働くことになったらこっちで働けたらいいなあと思います。勿論、働かずにだらだらと睡眠を中心にした生活を送るのが私の理想ではありますし、そもそも卒業が危ないのが現状なのですが。

駅から十五分程歩いて私は自宅に着きました。古い木造の一戸建てです。なんだか緊張します。第一声をなんて言おうか考えて私は立ち止まりました。

ガラリ、と向こうから横滑りの扉が開きました。「じゃあ行つてくるね、ママ」「行つてらっしゃい」なんて言いながら熟年バカツプルがキスをしています。

「……」

私の視線に先に気づいたのは父の方でした。父はスーツ姿です。きつといまから仕事に向かうのでしょうか。父はリストラされたのではなかったのでしょうか。

「……ママ、あとは頼んだ」

穏やかな顔つきをしている父はいつになく頬を引き攣らせて私の横を通り過ぎて行きました。母が私に気づきます。

「あ、あら、ミーちゃんお帰り」

私より少し背の高い母が笑顔で言いますが誤魔化される私ではありません。

「ドウィウコトカ説明シテクレマスヨネ？」

自分で思ったよりも無機質な声が出ました。「ひつ……」と母は短い悲鳴を漏らしますが一体何をそんなに恐れているのでしょうか？ 私には全然まったくわかりません。

「あのね、違うのよ、ミーちゃん。ママはあなたのことを思って……」

……」

「ドウィウコトカセツメイシテイタダメマスヨネ？」

「わ、わかったから。その女の子がしゃいけいけない表情はやめて！」
母は洗いざらい話しました。

怠惰な生活を送る私を大学の成績の通知から知ったこと。私が言
って効くような性格だと思わなかったこと。叔父に協力を求めたこ
と。……ということは赤山慎吾もグルでしょうか。というかいま思
えば家賃のかかる寮を解約して家に戻ってこいと言ってこない時点
で気づくべきでした。私のアホめ。

気がつくとも母は「ごめんなさい…… ごめんなさい……」と部屋
の隅で縮こまりながらうわ言のように呟いていました。なぜかとも
も爽快な気分でした。あまり長居する気はなかったのですが、父に
も制裁を…… 間違えました。父にも積もる話がありますのでここ
に一泊することを決めます。

翌朝になつて母に続き、父までもが部屋の隅で膝を折つて座り込
み「ママ、僕たちはどこで教育を間違えたんだろう……？」なんて
頂垂れています。どうしてそんなことを言うのかわからずに私は
とても悲しい気分になります。ほんとですが、自分の表情の筋肉が
緩んだまま実に楽しそうな顔つきになっているのはなぜでしょうか
？ 人体は不思議です。直前まで父の見ていたテレビの向こうで国
会議員のなんとか山さんが演説をしていました。その顔がどこか所
長に似ていてムカついたので私はテレビのスイッチを切ります。

ともかく、両親共に元気そうにやっていることに私は少し安心し
ました。と、キレイに締めておくことにします。

……はあ、いや、本当に心配していたのですよ？ 父がリストラ
されたと聞いて。これまで何もしなかったのは単に自分のこととい
っぱいいっぱいだっただけで。特に行動しなかった私にも問題はあ
るといえます。ありますが、気持ちが悪切られるというのは辛いこと
です。

ぐだぐだに和解するのも癪でしたので早々に電車に乗って私は街
に帰ります。始発と違い昼前の電車にはいろんな人が居ます。

子供を連れたお母さん。

音楽を聴く大学生。

おしゃべりする二人組みの女の子。

流れる景色を見ている老人。

特別にはなれないまでもその景色の中に自然に居られたらなあ、と私はなんとなく思います。

駅まで帰ってきてまた厳しい都会の残暑が私の全身を叩きます。

一ヶ月前の私ならこれに敗北して学生寮に閉じ籠っていたでしょう。しかしいまの私には使命があります。そうです、私に企みを内緒にしゃがった所長をぶん殴らなければなりません。

私は駅から悪魔払い探偵事務所を目指そうとして、人混みに行く手を阻まれました。为什么呢？　なんか先頭近くにテントが張ってあってそれに向かって並んでいるようですが……？

ここを抜けることが出来なければ遠回りとなってしまうですが、知らない人に話しかけて通して貰うことと遠回りすることでは私は遠回りを選びました。

しかしわざわざ遠回りして辿り着いた悪魔払い探偵事務所に所長はいませんでした。無用心なことに鍵も掛かっていません。私は勝手に冷房を入れて所長を待ちます。コンビニにでも行っているのでしょう。ほどなくして帰ってきた所長の手には紙パックのコーヒ―牛乳がありました。

「明日まで休むんじゃないかったのか？」

テーブルにコンビニの袋を置きます。

「明日は出ます。いいですか？」

所長は頷きます。私は訊かなければいけないことを訊ねました。

「所長はなぜ私を雇ったのですか？」

「達真の頼みだから」

何を今更、というように所長は言います。ちなみに達真というのは叔父の名前です。

「仕送りを止めた件には所長は関与していないのですか？」

「なんだそりゃ？」

所長には本当に心当たりはなさそうです。情調酌量の余地ありでしょう。私は舌打ちを一つします。

「……なんで舌打ちなんだ？」

「所長をぶん殴る口実が出来なかったことに対する舌打ちです」

「お前、俺のことをサンドバッグかなんかと勘違いしてないか？」

俺だって殴られたら痛いし、刺されたら死ぬんだぞ……」

「え、そうなんですか？」

所長は溜め息を吐くと「もういい」と言い、定位置に座って文庫本を読み始めました。私も本棚を漁ります。恋愛か神話関連の話があるか探してみます。ジャンルは雑多で英国文学からライトノベルまでなんでもありでした。私は下段のほうにあったライトノベルを一冊抜いてソファに座ります。……あれ？ 所長は叔父のことを達真と呼びましたが、叔父を達真と呼ぶ人は少ないです。

「所長、所長は叔父とはどういう関係なのですか？」

「達真か？ 元依頼人だ」

「元依頼人……」

私にはあの優秀な叔父が他人に頼る所が思い浮かびませんでした。私が思う以上に所長は優秀なのかもしれません。

「まあ、俺も達真には世話になったからな。足手纏い一人雇ってやるから、い」

私は所長をぶん殴りました。

「……お前もう帰れよ」

派手に椅子から転がり落ちて本棚の角に頭をぶつけた所長が言います。

「ええ、そうします」

私はそれに背を向けました。……背を向けてはいけないことを私は知っています。ドアの前で立ち止まります。

「所長、やりすぎました。ごめんなさい」

振り返って頭を下げました。なんだか気恥ずかしくてそのまま事

務所を飛び出しました。

走ります。学生寮までは歩いて十分程度の道のりですが四分掛からずについてしまいました。部屋に入ろうと鍵を開けて、「あれ？ ヒッキーじゃん」隣室の春日井光さんに声を掛けられました。ちなみに「ひかり」と読みます。

「ヒッキー、つまり宇多田ヒール、素敵な響きですね」

「あんた絶対変だって」

光さんはギャハハと品なく笑います。光さんは男でもしないくらいに思いっきり笑う人で私の密かな憧れです。

「あんたさ、このところ部屋にいないけどどこ行ってるの？ 男？ いや、あんたに限ってないよね」

微妙にひどいですが否定できません……

「アルバイトですよ」

「ほんとに？ ヒッキー卒業じゃん。おめでと」

うーん…… ヒッキーを卒業したくありません。私は宇多田が好きです。

「どこで働いてるの？ コンビニ？ スーパー？ あ、本屋とか」「えーっと、ちょっと変わったところなのですが引かないでくださいね」

「引かない引かない。AV女優とかわたらちよっとお話くらいは聞かせて貰うけどね」

またギャハハ、と品なく笑います。この人のように生きていけたらなと私は少なからず思います。

「実は探偵事務所なのですよ。悪魔払い探偵事務所。変な名前ですよっ？」

「探偵事務所？ ヒッキー……、じゃなかった。確かに川口に似合わないねえ」

あ、ヒッキーはやめてしまうのでしょうか…… 少し残念です。「結構楽しいところですよ」

主に所長をサンドバッグにするのが。

「探偵事務所…… そっか、探偵事務所か」

光さんは少し俯いて表情に影を作りました。いつも明るく元気な光さんには珍しいことです。

「ねえ、川口。明日あたしをそこに連れてってくれない？ 相談したいことがあるんだ。十二時くらいにそっちに行くから」

いつになく光さんが深刻そうな表情をしたので私はほとんど反射的に頷いてしまいました。

「ありがと。それじゃまた明日ね」

光さんは改めて笑みを見せるとバッグを片手にどこかへ出かけて行きました。

翌日の昼過ぎに私は隣室のインターホンを鳴らしました。光さんは「ふあい？」なんて半開きの口で言いながらドアを開けます。約束の時間は三十分程前に過ぎていたのですが、光さん絶対に寝てましたね。

「あれえ？ ヒッキー……、が来るってことは、え、いま何時？」

「十二時半ですね」

「……ご、ごめんなさい！ 直ぐに仕度するから」

彼女は部屋に飛んで戻りました。かくいう私も約束の十分前に起きたばかりなのはここだけの秘密です。

「入ってお茶でも飲んで。冷蔵庫開けていいから！」

大抵のことは笑い飛ばしてしまう彼女の慌てた声がとても楽しくて私はつい笑顔になりました。……所長の性格の悪いところが移ったのかも知れません。表情を自然に引き締めます。

ふむ、私の部屋と当然作りは同じですが内容はまったく違います。私の部屋は物が多いのですが光さんのどちらかと言うと何もなく殺風景です。夏だというのになぜかコタツが出たままでした。タンスの上に写真があるのに気がつきません。光さんと女の子が一人写っていました。せつかなのでお茶をいただくことにします。冷蔵庫を

開けると、雑多な食材が詰め込まれていました。なんというか光さんらしい光景です。部屋に物が少ないのは多いと散らかるからでしょうか。なぜ冷蔵庫が例外なのかはわかりませんが。私は麦茶を出してコップに注ぎ冷蔵庫を閉めました。ふぁーあ、あくびを一つします。麦茶を一口啜りコタツに足を入れてボケーとしていると光さんが出てきました。

「あ、一口頂戴」

と言って私の麦茶を取るとぐいっと一気に飲み干してしまいました。光さん、一口が大きすぎます。

「よしっ、いこっか」

それでいてまったく悪びれないところも光さんは素敵です。

部屋を出て、私たちは他愛のない雑談をしながら歩きました。光さんは社交的な人ですから話題も多く私は聞き手に回ります。高校時代のバカ話などです。少し笑えないところもありましたがどちらかと言えば私がズレているのでしょう。笑顔を作っておきました。学生寮から徒歩で十分ほどのところにある雑居ビルとその看板を見て光さんは「うわ、悪魔払いつてほんとに悪魔払いなんだ」と感心したような声を出します。

私は一室のドアを開けました。いつもように所長はデスクの定位置で文庫本を広げています。

「おはようございます、所長」

「おう、さっそくで悪いが流しの掃……、客か？」

視線を上げて所長はようやく光さんに気づきました。

「これはどうも失礼いたしました。お掛けください」

なんて恭しく言いながら余裕のある笑みを見せて立ち上がります。光さんは少し緊張した面持ちでソファに座ります。私はお茶を淹れに隣の部屋に向かいました。熱いお茶は夏場には厳しいことに気づいたため冷蔵庫にボトルの緑茶を冷やしてあります。お茶菓子と一緒にテーブルに置いて所長の隣に座ります。

所長は光さんに自己紹介を終えたところでした。光さんの目がい

つもと違うことに私は気づきます。所長が比較的整った顔立ちをしているからでしょうか。光さん、騙されてはいけません。この赤山慎吾なる男は急に車を発進させて私を置き去りにしたり、私が見たいものを焦れているのが楽しいからという理由で隠したりする極悪非道な力ス野郎なのです。私がその分だけしつかり所長をぶん殴っていることはさておき。

「用件を伺ってもよろしいですか」

光さんはお茶を一息に飲み干して話始めます。私はメモを取ります。

「駅前でテントを広げている当りすぎる占い師というのを知ってますか？ 黒い半袖の服を着た日焼けした男性です。火曜と水曜以外はだいたい駅前にいます。占いというよりは悩みの相談みたいなものなんですけど、あたしの友達がそれにすっかりはまっちゃったんです。最近では何をするにも彼の意見を仰ぐようになってきて、もうほとんど信者みたいで……」

あたしも彼に占って貰ったことがあるんですが、気味が悪くて一度でやめました。彼が占うのは人間関係のことばかりで恋愛についてとか、喧嘩した友達との仲直りの方法とか相談したことに答えてくれるそうなんですけど怖いくらいにそれがぴったり当てはまるんです。いまじゃ駅前に列を作ってるくらいに評判になって。

あの子、バイト代をほとんど突っ込んで通ってて、最近やつれてきてるんですよ。ちゃんと食べてるのか心配で…… どうかして止めさせたいんです。お願いします。協力してください」

光さんは深く頭を下げました。所長は少し迷っているようです。所長は謎を解き明かすのは得意かもしれませんが、占いなんて信奉する人間も心理なんてまったくわからないでしょう。解決する自信がないのかもしれない。しかし所長は基本的に悪い人間ではありません。極悪非道でこそありますが。

「……どこまで出来るかはわかりませんが、やってみましょう」

所長は横目に私を見ました。それから直ぐに光さんに視線を戻します。川口の知り合いみたいだしな、とか考えたのかもしれない。なかなかかわいいやつです。よしよし、心の中で所長の頭を撫でます。

「ありがとうございます」

光さんは薄っすらと涙を浮かべて微笑みました。よほど大事な友達なんだろうな、と私は思いました。私もそんな友達が欲しいものです。光さんは袖で涙を拭きます。

所長はその占い師のいる駅と光さんの友達の名前を尋ねました。駅はここからの最寄り駅で、私が田舎に帰る時に使った駅です。光さんの友達は里中恵理さんというそうです。

「帰り道、わかりますか？」

私が尋ねると光さんは「うる覚えかも」と言ったので私は所長を見ました。

「送ってきます」

「ああ、頼む」

私たちは炎天下の中、再び外に出ました。

事務所に戻り、私は緑茶をいっぱい飲み干します。ちなみにいっぱいとは一杯ではなくたくさんのいっぱいです。

「はう……、生き返る」

こう炎天下の中で外に出るものではありませんね、ほんとに。

「なにやってんだ。駅まで歩くぞ。早く用意しろ」

所長、あなたは鬼ですか？

「しかし所長、具体的にどうするんですか？」

私は時間稼ぎに必死です。冷房の効いた所内に居た所長と違いこちらは往復二十分を歩いて戻ってきたばかりなのです。ちよっとくらい休ませてくれないじゃありませんか！

「わかんねえ。俺としては占い師のハナを明かしたいけど信者って

のがそれくらいで信仰を辞めるかどうかだな」

「所長はそういう人間の合理的でない部分については苦手そうですね」

所長は「そうか？」みたいな顔をしていますが、そうです。

「しかし当りすぎる占い師ですか」

「御託はいいからさっさと行くぞ」

あう…… 所長が部屋を出ます。私は渋々冷房を切って所長に続きました。鍵を掛けます。さらば冷房…… 涼しい部屋よ。

「とりあえず占い師とやらに会うか。手口がわからないことにはどうしようもないからな」

「はい！」

そうでした。占いですよ、占い。私は占いという物がかなり好きなのです。俄然やる気が出てきました。もちろん数少ない話相手である光さんからの依頼だというのもし少なからずありますが。

私たちは駅に向けて歩きます。

「所長、所長は暑いのが平気なのですか？」

「ん、まあ寒いほうが嫌いだな」

寒いより暑いほうが大丈夫だなんて所長は魔物か何かですか！

私はその原因に思い当たって、ふと泣きそうになりました。一般に体重の軽い人は暑さに強く寒さに弱いといえます。またその逆もしかりです。つまり所長は痩せ型でした。身長もあまり高くありませんがかなり細いです。私はというと…… いや、太ってはいませんよ？ 多分。…… 多分ですが。

駅に近づくとも行列が見えて参りました。先頭には黄色いテントがあり、初回無料だとかいう張り紙がしてあります。

「みなさんクソ暑い中、ご苦勞なことですね」

「まったくだな」

所長の同意を得ますがいまから私たちはそのご苦勞な集団に加わろうとしているのを思い出し、少し憂鬱になりました。どうみても列が空くまでには三十分は掛かりそうです。

……………。

十分が経ちました。

「川口、飲み物買ってきてくれ。コーヒー、その自販機にボトルのがあったからそれで頼む」

所長が千円札を抜きました。

「私も何か買っていいですか？」

「ああ、好きなのを買え」

パシられるのは癪ですがそういうことならまあいいでしょう。私は千円札を受け取り列を出ました。自販機にお札を入れてボトルのお茶を買い、一気に飲み干します。ゴクゴク、ふう、美味です。次に所長のコーヒーに手を伸ばそうとして、手を止めます。お釣りは所長に返すべきでしょう。しかし所長は好きなのを買えと言いました。本数に制限はありません。私は千円ギリギリまでジュースを買います。既に自分の飲んだ分と所長のコーヒーで三百円、残り七百元を余りが最小になるように計算すると…… 百五十円のボトルのジュースが三本、百二十円の缶ジュースを二本買えば余りが十円のみと私は暗算で弾き出します。幸いバッグは持ってきています。せめてもの情けとして私は所長のコーヒーは最後に買ってやることにしました。少しでも冷えたものという配慮です。私の優しさに所長は感涙するべきでしょう。

所長の下に戻り、よく冷えたコーヒーを渡します。

「サンキュ、釣りはいいや。やるよ」

私は愕然としてジュース五本の入った重いバッグを取り落としそうになりました。所長が疑問符を浮かべた間抜け面で私を見ているのがかなりム力つきますが、今回は所長に落ち度も悪意もありませんから固めた右拳は行き場を失います。私は溜め息を吐いて列に戻ろうとしました。

「お姉さん。順番抜かしちゃいけないと思うよ」

所長の後ろに並んでいた小柄な女の子が言いました。真摯な目でした。

「あの、私は元々こいつと一緒に並んでいてですね、」

「お姉さん。順番抜かしちゃいけないと思うよ」

私はたじろぎます。

「あの、えっと……」

「お姉さん。順番抜かしちゃいけないと思うよ」

「……すいませんでした」

私は項垂れて列から出ました。

「つて、おい。俺が占われるのか？ めんどくせえ。俺が抜けるからお前……」

「お兄さんも順番守らないの？」

「ああ、お兄さんは順番守らないんだよ。別にこいつに譲るだけだからいいだろ。お前の順番はかわらねーよ」

「じゃあお兄さんも一番後ろに行かないとダメだね」

「おいおい……」

所長は後ろを見ました。私たちが並び始めたときよりも更に長蛇の列ができています。

「わかった。降参、大人しく並んどくよ……」

子供は嫌いだ、と所長の目は口よりも遥かに雄弁に語っておりました。

「じゃあ私は後ろに並びますね」

クソ暑いですがジューズも五本あることですし妥協しましょう。

「なに言っただ？ 終わったら帰るに決まっただろ、つか俺が暇だからここにいろ」

……理不尽です。

そして時間潰しの手段が「しりとり」というのがまた不毛です。まあ私も所長も雑談ではあまり長く会話が続きませんが。ところで所長はなぜしりとりがそんなに強いのですか。十五分足らずで私の五連敗って…… とまあそんなこんなで所長に順番が回ってきました。テントの中へ入ります。ちなみに直前までだるさ百パーセントの空気を出していたのにテントに入る寸前で見事に表情を心底

楽しみという風に一新させていました。どうやったらそこまであざやかに猫を被れるのでしょうか？ 中の話を聞きたいなあと思いました。たが所長の後ろに並んでいた例の女の子にジーンと見つめられて私はテントを離れざるを得ませんでした。ほんと私って小心者です……三分程度がとも長かったです。所長がテントから出てきました。表情が少し硬い気がして私は驚きます。所長なら占い師なんて理論武装で簡単にやつつけてしまいそうな気がしたからです。

「一旦事務所まで戻るか。流石に暑いな」

私は頷きました。

事務所のドアを開けて真っ先に冷房を入れます。

所長はデスクの定位置で肘をついて顎に手を当てて何かを考えています。邪魔してはいけなかな？ と少し思いましたが私は結局好奇心に負けました。

「所長、占いとはどんなものだったんですか？」

所長は少し黙ってから「コールドリーディングって知ってるか？」と言いました。

「はい。あれですよ。誘導尋問というか、誰にでも当てはまるようなことから答えを引き出していくやつ」

所長は頷きます。

「基本的にはあんな感じた。けど国外の大学で心理学をばっちり学んでるっぽいんだよね…… 専門家でも手に負えんかも。ましてやそっち系に素人の俺じゃとてもじゃないけど無理だ」

所長が完全な白旗を掲げるなんて私にとってはかなり意外なことでした。

「話を聞いただけで本人どころか周囲の人間の心理状態まで推測して組み立てるんだもん…… いや、すげーわ。正面から崩すのは少なくとも俺には出来ない」

「じゃあ」

諦めるのですか？ と私は訊ねようと思いました。

「正面から無理なら側面から行くしかないだろ。被害者……、って

言い方が正しいのかわからんが、そっちを当たろう」

諦めるはありますがませんでした。所長とは負けを認めた上でなお勝ちに行くタイプの人間です。負けず嫌いともいいます。

「しかしまあいきなり俺たちが行っても警戒されるだけだろう。依頼人の光つて人、あの人に動いて貰うか」

所長はいくつか尋ねて欲しいことのリストを挙げて事務所のパソコンから光さんにメールで渡しました。二時間ほどしてメールが返ってきましたが結果は芳しくありませんでした。

恵理さんはほぼ聞く耳持たずで「彼は正しい」とだけ言って光さんを追い返したそうです。

「なんだか信仰宗教の信者みたいですね」

所長は少し苦い顔をします。宗教に何か嫌な思い出でもあるのでしょうか？

「悪魔払い探偵事務所ですれを言うのもどうかと思うが、まあそうだな。つっても言うてる内容が正しい分だけ間違いを突きつけられないからそれよりよっぽど厄介だが。しかし思考の放棄ねえ。他人の言いなりに生きて何が楽しいんだか」

「……所長、少し思っただんですが」

「なんだ？」

光さんの友達はその間に間違っているのでしょうか？ 自分で考えずに他人に判断を委ねるのは本当に正しくないのですか？ 所長がそれを間違いだと言うのは所長が強い人間だからではないでしょうか？ 弱いことはそんなに悪いことですか？

「……いえ、なんでもありません」

しかしそんなことを言えるはずありません。自分の弱さを認め、露呈することが出来るほど私は強くないのです。

「……？ まあいい。まずは他の信者で実験してみるか。動くのは明日の朝からだな」

ちょっとコンビニまで出かけるところでばったり光さんと会いました。

「やあ、川口」

光さんはいつも通り快活な笑みを見せます。友達に一方的に追い返されて辛いでしょうに、強い人だなあと私は思います。

「どうも」

私も笑みを作ります。

「コンビニ？ 一緒にいこっか」

「はい、行きましょう」

光さんは財布しか持っていない私の軽装を見てそう判断したようです。断じて三枚千円のＴシャツを見て判断したのではないと主張します。

「そういえば恵理さんはどういう人なんですか？」

「んーとね、まあ性格はよくないかな」

随分はつきりと…… いえ、光さんは元々そういう物言いをする人です。

「かわいいんだけどね、性格のせいで男でよく失敗してたんだ。いまの彼とはあの占い師さんのお陰で結構続いてるんだけど、あたしには苦しそうに見えるの。自分を抑えて占い師の言う事に合わせてみたいで。恋愛つてもっと自由に楽しいものだと思わない？ きっと自然体のあの子を受け入れてくれる人もいるんだよ。だからあんな歪な形で無理矢理続けるのは、あたしはよくないと思う」

光さんの口調がどこか自分に言い聞かせているように聞こえて私は違和感を覚えました。きっと気のせいでしょう。

コンビニに入り私はＡＴＭでお金を引き降ろします。そうそう、仕送りが復活しました。しかし悪魔払い探偵事務所の仕事を私が続けているのは辞めると切り出すのが面倒だからでしょうか？ 朝は寝て昼は寝て夜は寝る生活への誘惑は相変わらずですが、多少なりとも真人間への道を踏み出せたんじゃないかなあと私は思います。少しばかりの甘いものを買って帰ります。光さんはお酒をかなり

買っていました。「これからちよつと飲みにない？」なんて誘われますが、申し訳ないことに私はお酒が飲めないので遠慮させていただきます。……よい子のみなさん、二十歳未満の人間はお酒を口にしてはいけませんよ？ 悪い子のみなさんは止めようがありませんからせめて自己責任でお願いします。

帰り道。ふと言葉に詰まります。私は切り出しました。

「光さん、その恵理さんという方に会いたいのですが」

「……わかった。あ、丁度いいや。明日テニスのサークルやるからあたしと一緒に来なよ」

テ、テニス？ この天性の運痴である私に今更スポーツですと！？

「それじゃねー」

光さんは早々に部屋に戻ってしまいました。私は愕然として立ち尽くします。

やがて気を取り直した私はとりあえず部屋に入り携帯電話で所長に連絡を入れました。明日、恵理さんと会う旨を伝えると「探偵事務所のことはまだ言うな」とだけ指示されます。実を言うと私は「まだ時期尚早だ。行くな」とか言ってくれることを期待していました。うう……自分の運痴ぶりをどうしても披露しなえればならないようです。

大学に行く朝というのはいつも足取りが重いものですがその日はいつにもまして全身が倦怠感を訴えてきました。しかも昨日は起こしに行くまで起きなかった光さんが約束の五分も前に「かわぐちー、いこー」なんてドアを忙しく叩いて私を急かしています。私はなるべく動きやすそうな服装を選びました。ドアを開けます。

「やっ」

朝日と光さんの笑顔が眩しいです。

「んんっ？ なんだか暗いよ、川口」

「大丈夫です」

光さんは楽しそうです。テニス、というかこの人は体を動かすの

が好きなんだろうと思います。大学まではほど近いです。学生寮なので当然といえば当然ですが。

普段授業のある建物のほうを見ました。夏休みなので誰もいません。私はこのまま大学なんて無くなればいいのと思ってしまいません。誰も知り合いがない授業で、あの疎外感を受けることもないでしょう。光さんとは学科も学年も違いますから、授業が重なることはほぼありませんし、もし重なっても彼女は他の友達と一緒にいることでしょう。

「どうしたの？」

「いえ、なんでもありません」

……いけません。今日の私はなんだかナーバスです。頑張って切り替えようと思います。

テニスコートにはパーン、パーンと小気味のいい音が響いていました。ボールが対角線を引いて相手側のコートを抜けて行きます。相手の打つ方向を予測してのダッシュ、体重移動、振り抜かれる腕力の籠った視線。

なんというか、あざやかです。私は思わず目を奪われます。

「活動は週に一回、ゆるいサークルだね。特に実戦的なことをやってるわけでもなくて、大学で場所だけ借りてる感じ。初心者歓迎だよ」

へえ……じゃあ、ありません。普通に見とれてどうするんですか、私。調査の一環としてここに来てるのに！

「恵理さんはどちらですか？」

「えっと、恵理は…… いたいた、あの子だよ」

光さんが指を差したのはコートの隅の方で打っている人でした。あまり上手ではないらしく何回かに一度はボールが見当違いの方向へ飛んでいきます。すごいのは相手の人でしょう。その見当違いの球をほとんどさばいて相手のコートに戻します。

「恵理の相手が恵里の彼氏で、近藤さん。このサークルで一番上手な人かな。ちなみに二番目はあたし」

言ってることは結構傲慢なのにそう聞こえないのは光さんの才能でしょう。

「じゃ、ちょっとやってみようか」

光さんは「やつほー」なんて大声でいいながら入って行って「あの子は？」「知り合い。運痴だけどスポーツに興味あってテニスしてみたんだって」と紹介しながらこちらにラケットを放ります。

「……やつぱりやるのですね」

私は小声で呟きました。

「テニスは初めてかい？」

大柄な男性が尋ねてきます。

「えっと、はい」

「興味あるんだってね。うちは初心者歓迎だから、楽しんでくれると嬉しいかな」

男性はボールを渡してくれました。

「はい、ありがとうございます」

コートに入って光さんと向かい合います。

「……えっと、」

私は軽くボールを上に戻りますが、打てる気がしなかったので一度キャッチして下から当てました。ボールは力なくネットに当たって転がります。

「……ごめんなさい」

「ギャハハッ！ まあ川口のことだからそんなことじゃないかなあと思ってたけど」

光さんは腹を抱えて笑い転げていました。いつそ清々しいくらいに。高校時代に運痴振りを笑われたことがあります。その場は氣を使う振りをして授業が終わり、私が更衣室を出たあと私に聞こえないだろうと思われる場所で笑われていました。光さんが正しいとはまったく思いませんが、あのとき私は少し泣きました。今は泣く気にならないことを考えると私にはこのほうがいいのかもありません。

「こら春日井、笑いすぎだ」

さっきの大柄な男性が光さんを小突きます。「ちょ、待って、まだ苦しい……」なんて言いながらコート隅まで運ばれます。光さん、たしかに笑いすぎです。大柄な男性がこちらに近づいてきます。表情は微妙に険しいです。

「ごめんな、あいつはあんなやつだから気にしないでくれ」

「……はい。でもあれが光さんの魅力ですから」

ニツと私たちは笑みを浮かべました。男性は木谷さんと名乗ります。なんだかいい人そうです。

「基本から教えてもいいかい？」

「是非、お願いします」

ラケットの握り方から教わります。意外としっかり握らなくともいいんだそうです。私はひたすらがっちり握り締めていました。手首を動かさないように固定して、ラケットは腰の辺りで地面と平行になるように。何度か素振りをします。

「じゃ一回打ってみようか」

ボールを渡されます。パン、っと軽い音がしてボールはギリギリネットを越えました。

「おお、さっきよりは断然いい感じですよ」

「だろうね」

苦笑されます。私も苦笑します。

「次はバックハンドだけど、これは両手でやったほうがいいかな」
ふむふむ、やり方は普通に打つのとあまり変わらないのですがどうしても窮屈さがあります。それでも打ったボールはきちんと相手コートに届きました。

「軽くラリーしてみようか」と木谷さんはいい向こう側のコートに立ちました。私が打ちやすいように山なりのボールが飛んできます。ボールをよく見て私はそれを打ち返しました。大ホームランでした。

「……あはははは」

「気にしないで。続けるよ」

木谷さんはもう一球山なりのボールを打ちます。さつきホームランしたのは、多分ラケットが地面と平行になつていなかったからでしょう。えっと、肘と手首を固定して、えいっ。相手側のコートにボールが落ちます。木谷さんは既にそちらに回りこんでいました。私の手元にボールが帰ってきます。私は平行を意識してまたボールを打ちます。ボールはコートに落ちました。木谷さんがそれを拾います。……なんだか楽しくなってきました。

と、言っても私は本命があくまで調査であることを忘れていません。横目で時々恵理さんの方を確認します。光さんが相手の男性に声を掛けて、でも結局日陰に戻るのが見えました。なんて言ったのでしょうか？ あとで訊く事にします。「わっ」気を取られていたらミスしてしまいました。ボールは跳躍をやめ、こちら側のコートを転がります。

「すいません」

「いや、誰でも始めはそんなもんだよ」

三十分ほどそんなことを続けただけで足も腕もまったく動かなくなつてしまいました。高校の時の体育の授業というやつはあれでも意外と大事だったんだなあ、と気づかされます。十二時頃になつて「休憩しようぜー」と誰かが言いました。私も日陰にお邪魔します。人口密度が上がるとやはり緊張しますが仕事で来ているんだと言い聞かせて逃げ出したいくなるのを堪えます。

「川口さんはこのサークル入るの？」

木谷さんが話し掛けてきます。

「え、っと」ほんとは入る気なんてさらさらないのですが「まだ考え中です」と言っておきます。

「そっか。うち人数少ないからね。もう少しメンバーが増えたらいいんだけど」

木谷さんの横目が恵理さんと近藤さんのほうに移りました。

「光が辞めちゃったら終わりだろうなあ」

呟くように言ったのを私は聞き逃しませんでした。

「光さんが辞める？」

「ん、ああ、元々彼女は向上心が強いところがあるだろ？ だから近藤とよく打ってただけけど、あ、近藤はあっちでやってるうちで一番上手いやつ、近藤のほうが最近里中に付きっ切りだからな。彼女なりに不満に思うところはあると思うんだ」

とするとさつきも自分と打つように言っていたのでしようか。私は依頼の背景が少し窺えた気がしました。しかし冷静に考えてみると、光さんが恵理さんと近藤さんの仲を引き裂くために依頼なんてしたわけじゃないか、と自分の考えを恥じいります。私は他の人と話している光さんが私たちの会話が聞こえない位置にいることを確認してから小声で言いました。

「で、木谷さんは光さんが好きなんですか？」

ぶつ、お茶を口に含んでいた木谷さんは吹きだします。

注目が集まりますがなんでもない、少し噎せただけと木谷さんは言い訳をしました。

「なあ、俺そんなにわかりやすい？」

木谷さんは小声で返してきます。半分、というか四分の三くらいはかまかけだったのですがここまで見事に掛かるとは思いませんでした。

「はい」

ですがここは格好をつけて全てお見通しという風に言っておきましよう。

それから休憩終わりに後半もテニスをやるかお昼を食べに行くかという話になってみんなでお昼を食べに行きました。学校の近くにある定食屋さんです。私は急に運動をしたせいか胃が物を受け付けませんでした。みんなよく入るものです。スポーツをやっている人はすごいなあとは思いますが。食べ終わってしばらくはダベっていました。そこで解散となりました。私は光さんと学生寮に戻ろうとしましたが、光さんは一人大学の方へと帰って行きます。

「？」

私は不審に思つてあとをつけました。

光さんは一人で大学の壁に向かつてボールをぶつけていました。

「……」

光さんはきつともう少し練習したいのでしょう。きつと週に一回では物足りないのだと思います。私は壁当ての様子をしばらくみていました。

「川口さん？」

後ろから名前を呼ばれて私はびっくりして肩を震わせます。

「こんなとこで何して……」

言い掛けたところで木谷さんも光さんを見つけました。私は良いことを思いつきます。思い切り木谷さんの背中を（物理的に）押ししました。驚いて光さんが振り向きしました。

「えつ、タニツチ？ は、恥ずかしいとこ見られたな……」

「あ、いや、その……」

木谷さん、そこは押すところです。なんて私は自分だと絶対できないことに他人行儀な声援を送ります。

「試合、やらないか？」

木谷さんが言いました。

「……うん、やろう！」

光さんらしい気持ちの良い返事でした。その辺りで私は学生寮に向けて歩き出しました。

「おはようございます」

翌日にドアを開けると所長は行儀の悪いことにデスクの上に仰向けに寝転がって手足を投げ出していました。頭が端からはみ出していて逆さまの顔がこちらを見えています。

「しょ、所長？」

「おう、川口」

何をしてたのでしょうか？ というかそれはともかくとして。

「所長、私だったからよかったものの今のを依頼人とかに見られた

ら確実に逃げられますよ」

「気をつけとく」

所長は上体を起こしてこちらに向き直り後ろ髪をポリポリと掻きます。

「で、何をしてたんですか？」

「シナリオを考えてた」

よくわからない返答です。

「正しくないものに正しい答えを突き付けるならともかく、正しいものに間違ってる答えを突き付けるのってスゲーむずいんだわ」

……？

「ま、実験してみるがちゃんと釣れるかねえ」

所長の携帯電話が鳴ります。着歌ではなく初期設定のままらしい野暮ったい音でした。メールのようです。

「出かけるぞ」

「その前に、テニスの件の報告をしてもいいですか？」

「歩きながらな」

所長はそれを聞いても「ふーん」としか言いませんでした。光さんの周囲のことはさほど重要とは考えていないのでしょうか？

「所長、占い師のところに行くのですか？」

「なんか占い師って呼び方いやだな……」

悪魔払い探偵事務所の所長が占い師を否定しますか。如何わしさからすれば断然悪魔払いのほうが上だと思っただけですが。

まあそんなことは比較的どうでもいいでしょう。

所長が駅近くのファミレスに入ったので私もそれに続きます。大学と違って高校や中学の夏休みはもう終わっているのだからあまり賑やかではありません。所長はコーヒーを注文します。私は長居するのが尋ねて所長が頷いたのでドリンクバーを頼みました。「自腹な」「！？」「冗談だ」私はぶん殴ろうとした手をなんとか止めました。ここでぶん殴ればほんとに自腹を切られかねません。所長がコーヒーを、私がオレンジジュースを啜っているとそのうち一人の大学

生らしき男性が所長の前に座りました。

「で、今日も居たか」

「ばつちり、いま並んでるよ。あと三十分もすれば終わると思う」

所長は私に内緒で恵理さんに接触していたのでしょうか。所長は彼に一万円札を握らせませす。大学生風は席を立ちました。店から出ていきます。

「所長、いまのは？」

「バイト、必要だから雇った。古本屋で立ち読みしてた如何にも暇そうだったやつ」

寝飽きて暇な日を古本屋で立ち読みして過ごすことが多々あった私には耳の痛い言葉です。

「あと二十分が出るぞ」

所長が言い、私はそれに合わせて何回かわりしたドリンクを空にしました。会計を済ませて外に出ます。

例の占い師の行列は前よりも幾らか減っていました。といっても少なくともありません。初めの一回は無料だからという理由で興味本位に来ていた客が減ったんだろうなと私は推測します。

「興味本位の客が減ったんだろうな」

所長が呟きます。なんだか勝った気分になりました。あとは不気味に思ったか、という続きが私には聞こえませんでした。

「なににやついてんだ？」

「なんでもありません」

気持ちわりーな、なんて声が聞こえた気がしたので私は所長をぶん殴ります。なんだか久々な気がします。ああ、所長ときたらなんと殴り心地のいい生き物でのでしょうか。

「……お、あれだ」

よろけながら所長が言います。前のほうに並ぶ女性を気づかれなように指差します。

「恵理さん、ではありませんよね？」

「ああ、別の『信者』だ。バイトに探させた。今日含めて三日連続

でここに来てるらしい」

「三日つて、光さんが依頼に来た日にもうバイトを雇っていたんですか？」

「なに言つてんだ？ 俺らが並んでたときに五つ前にいただろ。バイト雇つたのは次の日だ」

そんな人間いちいち覚えているはずがありません…… 所長は変態ですか。

女性がテントに入ります。

「出てきたら声掛けるぞ。あとこれ。話、合わせろよ」

所長は名刺を抜きました。悪魔払い探偵事務所…… ではなくどこかの大学の名前が印刷されています。

「しょ、所長！？」

「話を聞き易くするための方便だ」

それでもこれは身分詐称というかいわゆる詐欺では……、あ、女性がテントから出てきました。所長が近づいて声を掛けます。名刺を見せると確かに幾分警戒心が薄れたのが見て取れました。

「あの方の力について興味があります。あれは本当にすばらしい」
などと所長は言いました。

私は少し所長の天職は詐欺師なのではないかと思っています。

人当たりのいい笑顔と同性である私を連れているのでナンパと思われるなかったのでしょうか、女性はあっさりとファミリーレストランまで付いてきました。先ほどとは別の店です。適当に注文します。私はドリアを頼みました。

所長と彼女は占い師について褒めちぎる言葉を交わしました。そのうち彼女のほうから自分がどういった相談をしたのか話始めます。主にいま付き合っている男性のことらしいです。占い師の言うとおりにすれば彼が喜んでくれるだとかそんなことを話していました。モグモグ。

その辺で唐突に所長は言います。

「ところであれはインチキですよ」

相手の女性はポカンとしました。今まで全肯定していた相手が突然全否定に回ったのですから当然です。私は表情を変えそうになりますが我慢します。というか所長、私にも何をやるかくらい教えておいてください！一瞬喉に米が詰まりかけました。

「実はあなたが占いに嵌っていることを快く思っていない友人方の依頼で、少しあなたとあの占い師のことを調べさせていただきました。申し訳ありません。あ、依頼人のことは訊かないでください。匿名で、このことです」

彼女は呆気にとられたのか一言も発することができません。

「あの占い師が火曜と水曜にあの場所にいないことをご存知ですか？その二日間別の場所で占いをやっているんです。あなたの彼はそちらの常連なんです。あなたも、あなたの彼も占い師の言う事に従って行動していた。言うとおりになるのも当然です。これが当たりすぎる占いの正体ですよ。その証拠に一度目は無料で当たり障りのない部分だけ。本格的なことを言い出したのは二度目からでしょう？彼にはあなたのことを知る時間があつた。ホットリーディングと言いまして、相手のことを事前に調査してさも言い当てたように振舞う。占い師の常套手段です」

女性は青ざめて携帯電話を取り出そうとしています。所長はここぞとばかりに追い討ちをかけます。私はドリアを食べます。

「彼や占い師を問い詰めても無駄だと思いますよ。彼は誰かの指示であなたと付き合っていたなんて知られたくはないでしょうし、占い師は対処に慣れているでしょうから何を言っても無駄です。しばらく休んで終わりでしよう」

「でも、彼のこと以外も占い師さんの言う通りにすれば上手くいきます」

所長は首を横に振りました。

「どんなことを相談しました？友人のこと？仕事のこと？そんなものはホットリーディングと常識的な回答を弁えていればなんとでも言えます。うまくいったのはあなた自身の力です」

そこで所長は優しい声を出しました。

「あの占い師はあなたを騙しています。しかしあなたの彼はそうではありません。彼はあなたと幸せに過ごしたいからこそ占い師を頼ったのでしよう。そのお互いを思い合う気持ちさえあればあなた方はもうあんな物に頼らずとも幸せになれると思いますよ」

少し俯いていた彼女が顔を上げました。救われたような表情です。私は心臓の辺りに鈍い痛みを覚えます。私たちはいま彼女を騙しているのです。私はドリアを食べ終わりました。海老が美味でした。

「あなたの彼にも占い師のインチキを説明しようと思います。しかしあなたの名前は出しません。占い師のところへ通うように仕向けていたとだけ告げます。あなたはまだ占い師の元に通っていないかったです。そして二度と行かない。いいですか？」

彼女は頷きました。

「僕の話はこれで終わりです。お代は持ちますよ。それでは」

所長は伝票を取ってレストランを出ました。歩きながら所長に尋ねます。

「所長、いまの話はどれくらい嘘なんですか」

「ほぼ全部、あいつはホットリーディングなんか使っていないし、あの人の彼氏とも接触してないだろうな。あ、火曜と水曜は駅前にいないところはほんとか」

あっさりと所長は答えました。私はドン引きします。

「しかし大筋しか通ってないな。行列になるほど大勢の人間を全部調べるにはバックにもっと大勢の人間がついてないと不可能だ。雰囲気で飲んだがあの人その内気づくかもな」

所長が長い髪を掻きます。鎖のついた二本の口ザリオが揺れました。

「……所長、もうやめませんか？」

「は？」

「さっきの女の人はいからどうなると思いますか？ 所長が余計なことをして占い師の言葉をなくしたばかりに彼と別れてしまう

かもしれません。それはきつと彼女にとって幸せなことじゃないでしょう」

「まあな」

「ならもうやめましょう。人を不幸にして所長は楽しいですか？」

「おいおい、お前が持つてきた仕事だろうが」

私は所長の顔をよく見ました。所長は目を逸らしません。

「だいたいフラれたならいまの状態がおかしかったんだろ？　いつかバテて破綻するなら終わつていた方が傷が軽いんじゃないか。そもそも俺は他人の力に縋って生きようつてところが、気に食わんがな」

それでも。例え正しくなくても。

「……いえ、所長にはきつとわからないでしょうね」

みんなあなたほど強くはないのですよ、所長。

「ああ、わかんねーな。お前もう帰って寝てろよ」

まだ四時頃でしたが私は言うとおりにしました。所長がかなり苛立っているのがわかったからです。なかなか表情の読み取れない所長には珍しいことでした。

私はどこか人任せでした。これといって自分で行動しようとしたことはありません。

誰かがやってくれる。どうせ自分と関係ないところで決まる。いつもそう思っていたし、またそれはほとんど事実でした。実際に誰かがやってくれたし、私と関係のないところでいろんなことが決まっていたのです。

人任せな生き方というのがそんなに間違っていると私は思いません。私を含め多くの人たちはなんとなく流されて生きています。

「うー……」

自分がアホなのだと私は改めて思いました。難しいことを考えながらでは眠ることができません。コンビ二で甘いものでも買えばよかったのですが、今日はそれもしていませんでした。

……光さんは近藤さんのことが好きで、恵理さんと近藤さんが別れればいいと思って悪魔払い探偵事務所を訪ねたのでしょうか？
恵理さんは性格が悪いらしいですから、占い師の助力がなければ別れることは十分ありえそうです。私はどうするべきなのでしょう？
もし光さんがそういう目的を持って悪魔払い探偵事務所を訪ねたのなら私は光さんを糾弾するべきだと思います。しかし単純に占い師の言いなりを止めさせたい光さんの善意で、という考えも否定する根拠はまったくありません。

……………。

光さん、私はあなたをいい人だと信じています。

ぐー、ぐー。

……知らないうちに眠っていました。私は翌朝を迎えます。まったく私というのは随分都合のいい人間です。いつものようにシャワーを浴びて歯を磨き、Ｔシャツを着てジーンズを履いて、簡単にご飯を食べてへたな化粧をします。

十分の道のりを歩いて探偵事務所に行きました。

「おはようございます」

「おう」

所長はいつものように文庫本を片手にしていました。気だるそうな動作です。

「所長、今日はどこにもいかないのですか？」

「ああ、終わったからな」

「どういう意味でしょう？ まさか所長のクセに依頼を投げ出した？」

「里中恵理はもう今日限り占い師のところにはいかないだろうよ」

「へ？ 所長、どんな手を打ったんですか」

「言わない」

「ぶん殴りますよ」

「めっちゃめっちゃかつこ悪い手を使ったから言いたくないんだよ。少

なくてもお前が反対してた例のでっち上げは使ってないから安心しろ」

「……気になりますが、まあよしとしましょう。」

「とにかく、依頼達成だ。よくやった」

「い、いきなりなんでしょう。所長が私によくやったなんて。」

「飯でも食いにいくか、そのあとは今日はもう上がっていいぞ」

「時給が減るじゃありませんか」

「我ながら現金な女です。」

「ちゃんと出してやるっての」

所長は比較的笑顔ですがどこかぎこちない気がしました。里中恵理が占い師のところに行かないように打った手というのは所長自身そうとう気に食わないものだったのでしょう。胸の内にもやややしたものは残りますがぶん殴るのは我慢します。

所長と二人でファミリーストランに入ります。そういえば前回は仕事ということであまり意識していませんでしたが、男性とデート的なことをするのはほぼ初めてだと思います。注文を終えて私は向かいあった所長の顔を一度よくみました。やはり整った顔立ちです。目元まである前髪がそれを隠しているのが気に食いません。

「所長」

「あ？」

「結局のところ所長っていい人なんですか？ 悪い人なんですか？」

所長はテーブルに肘をついたまま黙りました。

料理が運ばれてきます。前回で味を占めた海老が美味なドリアです。店員さんがテーブルを去ります。

「……いい人だよ」

所長は言います。私は頷きました。

「何笑ってんだ気持ち悪い」

「乙女の笑顔を気持ち悪いとはなんですか。ぶん殴りますよ」

結局いつもの調子になってしまします。

私は所長がどこか寂しい人間のような気がしていました。もしか

したら光さんにも同じ物を感じているのかもしれませんが。優秀なだけにどこか他人と打ち解けられない。本当の自分を明かせない。だからこちらから一歩踏み込もうとしたのですが、避けられてしまいました。しかしです。所長の性格上、自分は悪い人間だと言うとは思っていました。ですが所長は自分をいい人間だと言いました。半歩分距離が縮まった気がします。少しずつ距離を縮めて、いつか不思議だなんて言わずに所長のことをちゃんとわかってあげられたらなと私は思います。

「お前…… よく食うな」

私は所長をぶん殴りました。

ほとんど喧嘩しながらファミレスを出て、所長は探偵事務所、私は学生寮に歩き出します。

時刻は夕暮れ。夕焼けがキレイだけど少し眩しかったので私は振り返りました。決して所長の後ろ姿を追ったからではありません。所長は誰かとすれ違ったところでした。所長の伸びっぱなしの髪の毛が揺れました。

「…… え？」

グラリ、と、体ごと。

私は駆け寄ります。歩道に倒れそうになった所長の体を支えると驚くほど力が入っていないなくて私にはとても重く感じられました。腕の下に液体の感触があります。

所長！

声を出そうと思いましたが声帯が掠れて音になりませんでした。液体の感触が胸まで到達します。三枚で千円の安いＴシャツが真っ赤に濡れていました。所長の脇腹には深々とナイフが突き刺さっていました。

そこからどうなったのか自分ではよく覚えていません。気づいたら私は病院の長椅子に腰掛けていました。隣に誰か座っていますが顔を上げる気力なんてありませんでした。

「どうかそのままお聞きください」

隣の誰かは言いました。私は頂垂れたまま頷きます。

「僕は遠藤と申します。職業は占い師です。わりとよく当たると評判なんですよ。ま、そのせいでこんなことになったんですがね。彼を刺したのは僕の信者でしょう」

「……」

「彼は助かりますよ。心配しないでください。必ず助かります。いいですか。僕の言うこれは気休めです。しかし彼は必ず助かります」

「……ほん、とうに？」

「根拠はまったくありません。たかが占いですから。しかし必ず助かります。まずはそう信じてください。それがいまのあなたには必要です」

「……わかり、ました」

「いいことを教えます。彼が里中恵理に僕の占いをやめさせるようにと使った方法です。呆氣に取られるほど簡単ですよ。彼は僕に頼んだんです。僕が占わないと彼女は占って貰えませんかね。里中さんは僕に依存していました。そのせいで大切な友人との仲が悪化するかもしれない。友人の方には里中さんを助けようとした以外の意図はありませんよ。里中さんにとってその友人はとても大事な位置にいる方です。それを僕が壊しかけた。僕は彼に感謝しなければなりませんね。あなたから伝えておいてください。僕はもうこの街から出ますので。よろしく願います。それでは」

私は顔を上げました。そこには誰もいませんでした。どこまでも純白な羽が一枚だけ落ちていました。所長の治療室から灯りが消えました。ストレッチャーが引っ張り出されます。もう心配ありません。と医者がいいました。

「天使……？」

白い羽はもうどこかに消えていました。

Shall we dance?

夏休みが終わり、私は大学に行くようになりました。まだまだ遅刻は多いですし、授業内容もわからないところだらけであまり楽しいとは言えませんがこれから楽しくして行こうと思える辺り進歩した方でしょう。アルバイトの方はというと、当面お休みです。暇があれば事務所に出向いて所長の本棚を漁って時間を潰しているので、少なくとも私の居る間に事務所の電話が鳴る事はありませんでした。ちなみに一番下の引き出しには分厚い六法全書がありました。なぜ？

学校が午前で終わるときなど急に暇な時間がぼつんとできてしまいます。私はよく本を読む方ではないので本棚を漁るにも限界があります。そんな時間があれば昔は決まって寝ていたのですが生活のペースが変わったせいかうまく寝付くことが出来ませんでした。所長のお見舞いにもたまに行きますがあまり会話が弾みません。余談ですが所長は警察に問い詰められても犯人の証言をほとんどしませんでした。正面から刺されていたのに犯人の顔を見ていないなんてありえるのか？ という刑事さんに対して「覚えていないものは覚えてないんですからしょうがないでしょう」と余裕綽々に返す所長は少し格好よかったです。やや声を荒げる刑事さんに至って平静に自分を拘束することは法的にどうたらこうたらと語って追い返してしまいました。

話を戻します。

「むう…… 無趣味とは意外に厄介なものだったんですね」

なんとなく所長のパソコンをつけてみました。しかしパスワードの壁に阻まれて私にはどうすることもできません。知り合いに詳しい人もいませんから諦めることにします。……所長のパソコンの中心、ちよつと見てみたかったです。やはりエロサイトとか入っているんでしょうか？ いや、流石に事務所のパソコンのそれはありません。

せんか。そういえば私は所長の自宅って知りませんね。所長は私の住所を履歴書で知ってるのに、不公平です。……暇です。試しに適当な数字だとかを打ち込んでみましょうか。こういう時の常套手段としてまずは生年月日を……、あれ？ 所長の誕生日っていつでしたっけ？ じゃあ何か関係のある言葉とか。……何も思いつきません。

よくよく考えれば私って所長のことをほとんど知らないんですね。明日お見舞いに行くときに根堀葉堀訊き出すことにしましょう。私はメモ用紙を取りました。

「なにかから訊こうかな、つと」

誕生日、血液型、家族構成、年齢、昔の話とかも聞きたいですね。それからそれから…… まあその場で思いついたことでいいでしょうか。

ちなみに私の予想では生まれたのは冷たい所長のことですから十一月あたりの冬。血液型はA B、もしくはA型。絶対長男です。弟か妹がいると思います。年齢は二十三くらいでしょうか。なんだか暗い青春を送ってそうです。あの性格の悪さは過去に何か不幸な出来事があったとしたか考えられません。

明日訊いてどれだけあっているか確かめてみましょう。

という訳で明日になって私は所長の病室を訪ねました。二週間くらいで歩けるくらいにはよくなっていて大部屋に移動しています。あと一週間もすれば退院できるそうです。

「所長、訊きたいことがあります！」

「病院ででかい声出すな」

「あつ、すいません……」

私としては意気揚々と馳せ参じたものですから冷静に出鼻を挫かれて妙に気恥ずかしくなってしまうました。所長のお隣のおじいさんが「元気があってええなあ」と微笑んでるので余計に。

「訊きたいことって？」

「所長の誕生日はいつですか？」

「七月十二日」真夏でした。

「血液型は？」

「O型」A型は関係ありませんでした。

「か、家族構成は？」

「父母に姉が一人」長男でもないようです。

「ね、ね、年齢は？」

「二十六、ってなんだ？ どうでもいいことばかり訊きやがって、

……？ なんで落ち込んでるんだ？」予想より三つも年上ですか。

いえ。そこまで外れてるとは思わなくて…… 私って人を見る目

がないのかもしれない。

「なんでもありません」

とだけ私は答えました。所長は疑問符を浮かべます。

「ところで所長、ご家族の方って何をしてらっしゃる人なのですか？」

「なんだよ、藪から棒に」

「別に深い意味は無いのですが」

所長が刺されたっていうのに一度もお見舞いにきた形跡がないのが少し気になったのです。

「さあ、あいつらがいまだどこでなにをしてるかなんか知らんよ」

「そうですか」

優秀な所長のことですから調べるのは簡単でしょう。興味がないということでしょうか。それとも私には話す気はないのでしょうか。どちらか私には判断がつきかねました。あるいはどちらかもしれません。

「そういうお前の家族はどうなんだ？」

どちらにせよ所長はこの話題をあまり好ましく思っていないようなので私は自分の話に移ることにします。

「そうだ、聞いてくださいよ所長」

私は夏の初めに私が悪魔払い探偵事務所に面接に来た理由につい

て話しました。父親がリストラされたと嘘をつかれたことです。途中から所長が声を殺しながら爆笑し始めたのでぶん殴って止めます。流石に今はお腹はダメですね。笑いを堪えて少し震えていた所長がようやく笑いを押し殺したらしく「いや、悪い。お前らしいなと思つてよ」と悪意のある表情を見せました。その顔が妙にム力ついたので私は所長をもう一度ぶん殴りました。後ろでおじいさんが「若いもんはええなあ」と微笑んでいます。

所長はベッドから体を起こし、一瞬だけ辛そうな表情を見せました。

「大丈夫ですか？」

「気にするなら殴るなよ…… ちよつと捻っただけだ」

そうでした。所長ときたらいつもまるで平気そうな顔をしているからあまり意識していませんでしたが、所長って刺されたんですよ……

「所長、あまり無理はしないでくださいね」

「たつたいま無理させたのはどのどいつだ？」

う…… せつかく気を使つてやってるというのに、いけ好かない所長です。

「はあ」

私は深く溜め息を吐きました。決めました。もうお見舞いにも来てやりません。……だから今日訊いておくことにしましょう。

「所長、ずつと疑問に思っていたのですがどうして悪魔払い探偵事務所なんですか？ 所長は無神論者ですよ？ 所長は認めたくないですが結構優秀だから、依頼があんまりこないのはあの事務所の名前のせいだと私は思っています」

「悪魔のせいに来るから、つてのは最初の事件の時にやったからわかつてるよな」

私は頷きましたが、あんなのは一部の人が納得しないはずですよ。所長のような合理主義者があんな手を使って罰を避けるのも私には理解しかねました。所長は自分が刺されるのを、罰を受けるのを避

けようとしかったからです。ふと私は思いつきを口にします。

「所長はまさか自分をいつ死んでもいい人間だなんて思ってますよね？」

「結構思ってるが？」

このクソ野郎。

「所長は非常に残念なことに私にとって微妙に必要な人間だから死んじゃダメです」

所長は呆気にとられた顔をしました。

「なんですか」

「いや、単純にびっくりした」

それからニツと笑みを見せました。

「わかったよ。今度から気をつける」

後ろでおじいさんが「若いもんはええなあ」と言いました。

それから一週間程が経過した雨の日の土曜日に、所長が退院しました。私は大学に行く以外は基本的にやるべきことがなかったので所長の快気祝いを準備しておくことが出来ました。といってもそう大掛かりなものではなく簡単な料理と飾りつけだけなんです。

所長は「暇だったなら他のバイトを探してもよかったんだぞ」なんて言いますが表情に照れが混じっていることが私の頬を綻ばせます。私は「所長と一緒にいいですよ」と都合のいいことを言っておきます。実はバイトの面接を五件受けて全滅していることなんて口が裂けても言えません。

「ん、うまいな……」

所長がパスタを口に運びながら言います。

「一人暮らしを始める前に料理だけは練習しましたからね。レパトリーはそんなに広くないですが」

私は少し得意になります。所長より優れているところがあるのはいいものです。……こんな私ってせこいでしょうか？

私の作った料理を褒めながら口に運ぶ所長がなんだかかわいく見え

てきました。「誰にでも一つくらいは取柄があるもんだなあ」……
やっぱりかわいくないです。

あらかた食べ終えて後片付けをしている時に不意に事務所のドアがノックされました私は後片付けを少しも手伝おうとしない所長をぶん殴ろうとしていた右手を下げざるを得ませんでした。

「どうぞ」

所長が言います。私は多少強引に流し台に置いてお茶を淹れに動きます。

「川口、タオル！」

隣室から聞こえてきたので上の棚を開けてタオルを一枚出しました。使っていないくても定期的に洗濯しているので汚れてはいません。私は窓の外がかなり暗いことに気づきました。時間はまだ遅くはないですから、雨はかなり手酷く降っているのでしょう。お茶は熱いのにしたほうがよさそうですね。とりあえずタオルを渡すのが先でしょう。私は白いタオルを持って応接間に戻り、依頼人の顔を見て持っていたのが熱いお茶でなくてよかったなと思いました。お茶であれば私は容器を取り落として軽い火傷を負っていたでしょう。濡れ鼠の状態でドアの前に突っ立っている依頼人が私が宇多田ヒールの次に好きなミュージシャンの青石浩介だったからです。

「川口？」

所長の声で私は我に返りました。

「……あ、タオルどうぞ」

「ありがとうございます」

あの青石浩介が私のタオルを受け取ってそれで顔を拭いています……私はあとでどうかしてあのタオルを持ち帰らせてくれないか所長の掛け合ってみようと決意します。

あ、お茶を忘れていました。隣室に戻り陶器製の容器を出してパツクのお茶の葉を入れてお湯を注ぎます。お湯がキレイな薄緑に染まります。

「どうぞ」

私はお菓子を添えてお茶を出して所長の隣に座りました。

「おい、メモ」

「あ、すいません」

なんだか緊張しています。私の初恋と言っても過言ではない相手が目の前にいるのですから当たり前でしょうか。紙とペンを取りました。

「ご用件を伺いましょうか。今日はどうしてこちらに？」

青石浩介はしばらくお茶の入った容器を握り締めて手のひらを温め、一口啜ると話しはじめました。

「一昨日の晩のことだ。俺は散歩してたんだ。特に目的もなくただブラブラするために歩いてた。だいたいの方角だけで適当に道を選んだから、どの辺りを通った時か正確にはわからない。暗かったしな。そしたらどこからか詩が聞こえてきたんだ。窓が開いてたんだろう。少なくともその時点じゃあ誰かに聞かせるためのものじゃなかった。何度か失敗してやり直したり、詰まったりしてた。女の声だった。俺はその詩の出所を探したんだけど、見つける前に終わったんだ。あ、ウタってのは歌のほうじゃなくて詩のほうな」

私がペンを渡すと彼は歌と書いてバツをして詩と書きました。

「頼む。俺はどうしてもあの詩をもう一度聴きたいんだ。別に旋律があざやかだった訳でもないのに、声が特別だった訳でもないのに、俺はあれに惹かれた。俺はあれが欲しい。手にいれたい」

所長はなんだか困っているようでした。もしや所長は事件を解決するのは得意でも人探しなどは苦手なんでしょうか？

「もし僕たちがその女に会えたとしても、彼女が拒否した場合は僕たちは一切の情報をあなたに渡しません。それで構わないならお受けいたします」

「構わない。とにかく探してくれ」

所長は頷いたあとに唇だけで「ほんとにわかってるのやら」と言いました。

雨足が弱くなるまで待つてから青石浩介は事務所を出て行きました。私は彼が事務所の階段を降り切ったのを足音で確認してから所長に尋ねます。

「所長、なんだか齒切れが悪かったのですがどうしたんですか？」

「お前こそなんであいつが帰った途端にタオルなんか抱きしめてるんだ……？」

「私のことは気にしないでください。あとこれ貰って帰っていいですか？ 所長はもしかして人探しとか苦手なんですか？」

「いや、気になるしダメだ。つーか逆でさ、俺は多分あいつの言つてた詩の女を知ってるんだよ」

「所長のケチ。タオル一枚くらい構わないじゃないですか！ え、じゃあ教えてあげたらよかつたんじゃあ？」

「別のタオルならやるよ。けどいまのお前を見てたらそれを渡すのはすぐくあの青石つてやつに悪い気がする…… 俺としてはそつとしといてやりたいんだが、まあ見ればわかるよ」

「……、？」

「一度会いに行くか」

私はタオルを抱いたまま所長の車に乗りました。煙草の匂いのしない車はあまり早くないスピードで進んでいきます。

とはいえ目的地はそう遠くなく二十分くらいで着きました。って、ここは……。

「所長が入院していた病院、ですよね」

「ああ」

そう広くない駐車場に車を止めます。所長はナースステーションで知り合いらしい看護士さんと少し話してから二階にある女性の病室を訪ねました。ネームプレートには三島 真由美とあります。所長がドアを二度ノックすると「はい」と十代特有の高い声が返ってきました。横滑りのドアを開きます。私は思わず息を呑みました。そこにいたのはパジャマ姿で化粧ツ気がなく少し気の弱そうな目をした高校生くらいの女の子ですが、彼女には右手は手首から先に違

和感がありました、左手は肘から先に。

義手だ。と私は思います。

「えっと、どなたですか？」

戸惑った声でした。所長が名刺を抜いて彼女の目の前まで持っていきました。

「探偵事務所の者です」

簡潔に説明を付け加えて名刺を隣の台の上に置きました。

「探偵さん……？」

どうして自分のところに？ という顔ですが同時に好奇心による光もありました。

「少しお聞きたいことがあるのですが、一昨日の晩は窓を開けていましたか？」

彼女は少し考えて「開けてたと思います。風が好きだから」と言います。私は所長が内心で溜め息を吐いたのがわかりました。所長はきつと詩の女が彼女でないことを期待していたのでしょうか。彼女の両腕を見ればそれは私にだって想像がつかます。

「僕たちはあなたの詩をどうしても聴きたいという方の依頼を受けてあなたを探しにきたんです。一度お会いいただけませんか？」

彼女はほとんど間を置かずに応えました。

「お断りします」

「そうですか。いえ、失礼しました」

「あ、あのっ」

私は口を挟まずにはいられませんでした。

「なんですか？」

「LAST RESORTっていう音楽グループを知りませんか？」

「……SPECIALの？ いまでも少しなら聴きますけど」

所長が私の袖を引きました。

「また来ます」

所長に引つ張られて私は病室の外に引きずり出されました。

「なんだそのLAST RESORTって」

「え、所長、知らないんですか？　もしかして音楽聴かない人？

青石浩介がボーカルをやっていたバンドですよ。二年くらい前にSPECIALって曲で大ヒットしたけど、二曲目以降の人気が出なくてテレビに出なくなっちゃったんです」

誰でも一冊は小説は書けると言いますが青石浩介のそれが一曲の歌だった、とは当時よく聞いた話です。それほど彼の一曲目はすばらしく、また二曲目は平凡そのものでした。

「……へえ、なんか気に食わん顔してるなあと思ってたんだが、ミュージシャンだったのか」

大多数の人間にとっておそらく所長の顔の方が気に食わないと思います。所長は唇のあたりに手を当てて言います。

「なるほどあの通りだから絶対会わないだろうなと思ってたんだが、いけるかもしれないな」

「コーヒー淹れてくれよ」

事務所に戻った所長の第一声がこれでした。

「たまには自分で淹れたらどうですか」

言いながら私はポットのある隣室に向かいます。所長はなぜか言葉に詰まったようでした。私はカップにインスタントの豆をいれましてお湯の温度を少しだけ上げてから注ぎ、緑茶用の温度に直しました。所長は一口啜ると相変わらず不思議そうな顔をします。

「お前さ、あの女の詩、聴きたいか？」

「え、あ……、じゃあ、はい」

「明日って日曜だよな。大学ないだろ？　十時頃に事務所に来い。遅れるなよ」

「わかりました」

「うし、じゃあ今日は解散。お疲れ」

所長はコーヒーを啜りながら読みかけの文庫本を取りました。私は所長の目を盗んでタオルを持ち帰ろうとしますが、事務所を出る

直前に呼び止められます。

「悪いがタオルが一枚足りないような気がするんだが見てきてくれないか」

意地の悪い笑みで言います。そのタオルは私の荷物の中です。私は渋々洗濯物を入れる籠の中にタオルを放り込みました。近日中午にあれは近くのコインロッカーに持っていかれるでしょう。その時までにすり替えを実行することを私は画策します。

学生寮まで戻ると隣の部屋から物音がしていました。多分ですが光さんが誰かとお酒を飲んでいるのでしょう。夏休みの終わり頃に木谷さんを連れてきたのですが、木谷さんはボロボロになつてうちに逃げ込んできました。「逃げるな！ この根性なし」なんて叫び声がドアの向こうから聞こえていて私はどうしても木谷さんを追い出すことができませんでした。私は初めてお酒を飲めなくてよかつたと思いました。夏に一度光さんに誘われたことがあつたからです。木谷さんは光さんの声が静まった頃にそれが畏だとも知らずに私に一言お礼を言つて出て行つて光さんに捕縛されていました。その後のことを私は知りません。大学で光さんを見かけた木谷さんがビクンと大きく肩を震わせたことぐらいしか。

ちなみに騒音などで光さんが文句を言われることは多分ないでしょう。ここの寮の人はだいたいみなさん光さんとお友達なので「またやってるよ光は」で済ませてしまえます。時間は割りと弁えるところか潰れて寝てしまふみたいですから。

今夜の獲物は誰なんでしょう。興味はありますが巻き込まれるにはごめんなので私は早々に自分の部屋に引き上げました。

「た、助けて！ やだ、やだああああ」

私には何も聞こえませんでした。壁越しですから、当然ですね。明日に備えて今日は早めに眠ることにしましょう。

「やめて、ひつ、いやああああああ」

うん。それがいいです。おやすみなさい。

夢を見ました。

どこかで聞いたことのある外国の音楽がバックミュージックとしてかかっています。辺りは暗く、視界が狭いためわかり辛いですが私はそこがどこかの公園であることを知っていました。私はベンチに座っています。とても不安な気分です。冷たい木枯らしが吹いていて私はコート裾を握り締めます。あの人は来るだろうか？ 私はそればかりを考えては気持ちが段々を落ち込んでいきました。

やがて誰かが通りかかりました。私は彼かと思って顔を上げます。しかし全然別の人でした。私は自分がいままで俯いていたことに気づきます。来ない、と自分でも感じていたのです。私はより深くベンチに体を預けました。帰ろう。立ち上がりかけたそのときに後ろから何かが触れました。私は振り向こうとしますがそれは私の体を両腕で捕らえていて逃がしません。見なくてもわかります。彼です。私は包まれている感触が心地よくて目を閉じました。私の冷たい頬に彼の温もりが伝わってきます。そして私は……

そこで目を覚ましました。なんだかすごく嫌な夢を見た気がします。私は二度伸びをしてシャワーを浴びて奇妙な気分を吹き飛ばそうとします。どんな夢だったのかよく思い出せません。所長が出てきた気がするのですが。うーん。タイルを打つ水の音がわずかに残った記憶の残滓を削っていきます。まあいいでしょう。悪夢なんてわざわざ思い出すほどの価値もありませんし。深く考えないようにしましょう。

時計を見ると朝の八時半です。私は冷蔵庫にあるもので簡単な朝ご飯を作って食べ、へたくそな化粧をして家を出ました。光さんの部屋から出てきたばかりの恵理さんを見つけて「おは、もが」口を塞がれました。恵理さんは自分の口元に人差し指をやりやります。……？ 下を指差して音を立てないように歩き出しました。とりあえずついて行くことにします。

「光から逃げてきたの。頼むからこのまま見逃して」

私は頷いておくことにします。逃げるのはよくないですよ、とは木谷さんの前例があるので私にはとても言う事ができませんでした。いったい光さんはお酒を飲むとどうなるのでしょうか……？ 気になります、訊くのが恐い気もしました。

「サークルに見学に来てた人よね？」

私は頷きます。

事務所に着いたのは九時半を少し回ったあたりです。

「おはようございます」

私は言いますが返事はありません。所長はデスクに突っ伏していました。もつといえは寝ていました。高校生あたりがよくする腕を組んでその上に頭を置く寝方です。

「……なんかかわいいのがム力つきます」

十時集合と所長は言いましたから時間的に余裕がある訳ではないのでしょうか。私は起こそうかと思いましたが躊躇います。

ええ、かわいいのです。所長は整った顔立ちをしているのですが普段は性格のせいか目つきが歪んでいたりとどこか皮肉めいた表情をしているのですが、こうして眠っていればそれも関係ありません。私は携帯電話を家に忘れたことを後悔します。撮っておきたかったです。仕方ないので十時の五分前まで所長を観察して、起こしました。

「所長、おはようございます」

肩を揺すって呼びかけます。

「ん、ああ…… おはよう、×××」

寝ぼけ眼を擦りながら所長は私でない誰かを呼びました。

「時間は？」

所長は体を起こして私を見ます。

「九時五十六分です」

「ギリギリか…… 悪いな、寝てて」

「いいえ」

いろいろおもしろいものが見れましたから。

「所長、所長は誰の名前を呼んでたんですか」

「……もしかして寝ぼけてなんか言ったか？」

「はい」

「忘れる」

「はい？」

所長はそれきり何も言わずに車を出して来ました。所長は寝てたらかわいいのに一度機嫌を損ねるとすぐにだんまりになって恐い顔をします。車が走り出します。私はそれ以上何も訊く事ができませんでした。ですがこれだけは言っておくことにします。

「所長つて、寝顔がかわいいですね」

所長の車は大きく左右にぶれて事故を起こしそうになりました。車の少ない道で大いに助かりました。私は少なくとも運転中にこのことを言うのはやめておこうと思います。

それ以降は安全運転でした。というより所長の車は基本的にあまりスピードを出す事がありません。

「所長つていつもこんなに安全運転なんですか？」

「いや、急いでたら捕まらない範囲で飛ばすぞ」

「へえ、じゃあなんでいまはこんなにゆるゆる走ってるんですか？」

「お前を乗せてるからに決まってるだろ」

……所長からすれば何気なく言った一言なのでしょうがキュンときてしまった自分がいることに私はどうすればいいでしょうか。

「ほれ、着いたぞ。さっさと降りろ」

「あ、う、……はい」

いかに顔立ちが整っているからと言って所長のようなクソ野郎の言葉に動揺している自分が悲しくなります。私は所長から顔を背けるようにして歩きます。必然床か壁が視界の中心になりました。真っ白い院内の廊下はどこか不自然に明るく映ります。光から連想するものは大抵希望や暖かさなど心地よいものでしょう。しかし明るすぎると暗闇と同じで何も見えません。病院の中というやつはそんな光の闇にあるような気がしてなりませんでした。

所長はエレベーターに乗り込み、最上階のボタンを押しました。最上階に彼女がいるのでしょうか？ 前に訪ねた彼女の病室はもつと浅い階だったと記憶していますが……？

「屋上だよ」

私の思考を見透かしたように所長は言います。

「あの子は屋上に小さい子を集めて自作の、青石いわく詩を披露してるんだ。身寄りがなくなてな、院長が善意で給料まで出してらしい」

「へえ」

院長さん、すごくいい人ですね。

「まあ、あくまで噂だ。詳しいことまでは俺は知らない」

エレベーターが最上階に到達し、私と所長は階段を登ります。開け放された屋上のドアの向こうに彼女は居ました。青空が広がります。昨日の雨が嘘のような晴天でした。彼女は不快そうな目で私と所長を見ましたが直ぐに視線を逸らしました。所長は壁に背をつけて彼女のほうをジッと見つめていました。……いまチクツとしたのはなぜでしょう？ 屋上は広くて子供たちが元気に走り回っています。私たちのことなんて特に気にしてはいないようです。私も所長も子供は得意ではないので助かりました。

「そろそろ始めるよ」

彼女は私たちが聞いた事のない優しい声を出します。思い思いに走り回っていた子供たちは直ぐに彼女の元を集まってきました。小学校のチャイムでもこんなに効果はないでしょう。

それから彼女が深く息を吸い込んで、台本も何もまったくなくそれは始まりました。

詩だ、と言った青石浩介の表現は間違っていました。彼女が語り始めたのは物語でした。詩のように深い情緒と比喩的な文で構成されています。それは澄んだ言葉と伏線、台詞と地の文で構成された小説でした。童話調の言葉を選んで聞き取り易いように一つ一つの言葉を正確に発音していました。出版されているような物語に

比べると圧倒的に短いでしょう。それでも一時間近く、私と子供たちは彼女の語る物語を聞き入っていました、

彼女が語ったのは美しさの代償として笑顔を差し出した氷姫のお話です。

姫はある目的から魔法使いに懇願し笑顔を差し出して、その代わり誰もが振り向くような絶世の美しさを手にします。人々は彼女の美しさを称え、女は羨み、男はそれを手にしようと誘惑しますが彼女と親しくなるに連れて段々と心が離れていきます。笑顔を見せない姫の心が人々にはわからないのです。やがて彼女は心の凍った冷たい姫としてみんなに遠ざけられてしまいました。そんなときまだ美しくなかった姫の友人だった一人の男性が魔法使いの元を訪れます。魔法使いは男性が何を求めて自分を訪ねてきたのか、と問います。男性はどうか姫に笑顔を返してくれるように嘆願しました。その代償にはお前の命が必要だ。魔法使いは冷たく言いますが、彼はただ笑いしました。魔法使いが何がおかしいのか訊ねると彼は言いました。

「姫に笑顔が戻るならばこの命など喜んで差し出そう」

魔法使いは感心し彼に必ず姫に笑顔を返すことを約束し、彼を殺します。魔法使いは彼の心臓を使って姫の笑顔を奪っていた魔法を解きました。

しかし姫に笑顔が戻ることはありませんでした。魔法使いが約束を破ったからではありません。姫が笑顔を差し出してでも欲しかったのは彼の愛だったからです。

スッ…… と心が冷たくなる感じが私の中を駆け抜けていきました。それは世界中でよくあるバッドエンドで終わる童話の一つでしょう。しかし彼女の口から語られた時、それは色を変えます。何がすごいのか私にはよくわかりませんでした。ただとただすごいと思います。何がおもしろいのかもまったくわからないのにおもしろい

と私は感じました。きっと世の中には時々そういうものがあるので
す。

病室に子供たちが帰っていきます。バイバイと陽気な声を上げた
り、名残惜しそうにしながら友達に呼ばれたり様々でした。彼女は
それを最後の一人まで見送ってから私たちの方を見ます。私は小さ
い拍手を送りました。

「なんですか」

「すごいな、って」

「……くだらない」

彼女は冷たく突っぱねますが私はあれを単なる照れ隠しだと知っ
ています。

「何かの本に載っているお話ですか？」

所長が尋ねます。彼女は「オリジナルですけど」と俯きながら少
し恥ずかしそうに言いました。けど直ぐに顔を上げて所長を睨みつ
けます。

「何か用ですか？ あたし、もう部屋に戻りたいんですが」

「いえ、一度あなたのお話を拝聴したいなと思っただけです。気に
障ったなら申し訳ありません」

慇懃無礼にも見える態度で所長が言います。

「……そうですか。ではこれで」

彼女が歩き出します。

「もったいないです……」

気づいた時には私は胸の中のイガイガした感情を吐き出していまし
た。

「おい」

所長が私を止めますが、もう自分でも止まりませんでした。私だ
ってそんな才能があればしたいことはいっぱいあります。でもでき
ないんです。私では何をやってもへたくそでうまくいかないんです。
「なんでそんな話が作れるのに病院の屋上で満足してるんですか？
もっと大きい場所で……」

「川口！」

所長の怒鳴り声で私は我に返りました。自然に視線が彼女の腕まで下りていました。ゴムとシリコンで出来た外装のそれが怒りに任せて私を睨みつけています。

「っ……」

唐突な理解と後悔が私を埋めます。

彼女には物語を書く両手がない。

いかに義手が進歩しても自由に文字を書くことが難しいでしょう。キーボードを普通の速さで打つ事もきつとできません。

「あなたにあたしの気持ちはわかりません」

彼女は痛みを堪えながら言いました。笑顔を失くした氷姫のように。

「形を変えることはできませんか？」

所長の声色は暖かでした。しかし一方で同じくらい静かで暗くもありました。

「あなたの話は小説の形を取っていますよね？ あなたに会いたいと言ってきているのは青石浩介というミュージシャンです。『LAST RESORT』といえば聞き覚えがあるのかと思います。

あなたの小説は小説にするには短い。曲に乗せて歌詞をつければ丁度いいと思いませんか」

「中途半端に…… あたしに夢を見せないでください。あたしは諦めたんだ！ 続きが書けなくなつて、誰かに手伝って貰わないとできないことが増えて、泣きましたよ。だけどやっと振り切ったんです。あたしはこのままでいいんだ。これ以上あたしを苦しめるな」

気が付いたら私は泣いていました。彼女が息を呑んだのがぼやけて映ります。所長のあまり大きくない手が私を撫でました。

「もう僕たちはここへ来ません。名刺をお渡ししましたよね？ 気が変わったらそちらへ連絡してください。申し訳ありませんでした」所長に手を引かれて私は屋上を出ました。

「階段、気をつけるよ」

「ありがとうございます……」

言いながら私は躓きそうになりました。所長が抱きとめてくれたお陰で怪我せずに済みましたが。

「お前、ほんとバカだな」

なんて言いながら所長はポケットからハンカチを出して目鼻を乱雑に拭きます。

「あ、あの、所長。化粧が……」

手を止めてくれません。

「とりあえず車まで戻るぞ、何するにもそれからだ」

最上階からエレベーターに乗ると誰かが乗り込んできました。化粧の落ちた顔を見られたくないのを察したらしい所長がその人との間に立つてくれます。変なところで気が利くのが所長のム力つくところの一つだと私は思いました。一階を足早に抜けて私たちは車に乗り込みます。

低いエンジン音を上げて車は走り出しました。

「所長、彼女は電話してきますかね」

私は鼻を囁ります。

「お前、それ洗ってから返せよ……」

所長はジト目で私を見て溜め息を吐きます。ハンカチは涙と鼻水でぐしゃぐしゃです。

「四割つてとこかな」

「四割ですか」

「心情的には電話したいんだと思う。あの子は小説家か何か本気で目指してたんだろ。だからどんな形でも自分の書いた話を子供じやなくてちゃんとした大勢に認めて貰いたい気持ちはある。だけど自分がいま以上の負担を抱え込めるかわからない。受け入れられなかったら？ 傷つくのが怖い。ビビってる。それで四割減。」

ようやく押さえつけた夢を目前に出されて失敗したらまたあんな気持ち味わうのか。両手を失くした時の絶望を思い出す。嫌になる。二割減。大雑把な読みでこんな感じかな」

「所長の分析って冷静すぎて気持ち悪いです」

「そりやどうも。いまだき五体不満足のリアル話でそこまでボロ泣きするやつのほうが珍しいと思うがな」

「めんもくないです」

「いいんじゃないか。正直俺だけなら二割を割ってたと思う。四割まで持ち込んだのはお前の力だよ」

「……所長」

それはもしかしたら私の一番欲しかった言葉かもしれません。

「まあ普段のお前がぐだぐだな役立たずだから二世紀に一回くらいはお前が役に立つような珍事があっても不思慮…… 運転中に顔を殴るな、危ねえ」

「なんで所長はいい場面をことごとくぶち壊しにするんですか！」

乙女心がわからなすぎます。別に所長にそんなことは期待してませんけど！

所長は泣くんだろうか、私はふと思いました。所長が泣くのはどんなときでしょう。痛いとき？ 苦しいとき？ 悲しいとき？ それとも嬉しいとき？

それから一日経ち、二日経ち、一週間が経っても彼女から電話はありませんでした。

十日ほど経って私が居るときに電話が鳴りました。所長が舌打ちを一つして口元まで運びかけた卵を纏ったカツを丼に戻し、受話器を取ります。

「はい、悪魔払い探偵事務所、ええ、そちらの依頼をお受けしました」

私はその隙を見逃さずに所長のカツを一切れ掠め取りました。人間の限界と言える早業でした。私はカツを口元に運びます。美味です。

「はい、ですがまだご報告できる段階にありません。申し訳ござい

ません」

しかし私は鬼ではありません。むしろ人並み以上の慈悲を持った情け深い人間であることを自負しています。

「青石さんに期待せずにお待ちくださいとお伝えください。では」
よって私は私の焼き魚定食から漬物を一切れ所長の丼に添えてあげました。等価交換です。

所長の横目が何やら不穏そうにこちらを見ているすが心美しい所長のことです。私の気のせいでしょう。

「いまのは？」

所長は溜め息を吐いて私を見ました。

「青石浩介のマネージャーらしい。売れないミュージシャンでもやる気を失くされると困るみたいだな、とっとと見つけてくれて念を押された」

「見つけたことは見つけたんですけどね……」

「まあこればかりはな、俺たちがどうこうするべき問題でもない」
「そうですね」

それきり会話がぶつんと途切れしました。私も所長も雑談が得意なタイプではないのです。

「……」

「……」

カツ丼を食べ終わった所長はデスクの定位置で文庫本を捲り、私は退屈を持て余します。所長が腕にぶら下げている口ザリオが揺れているのをしばらくは見つめていました。浅く窓から入る太陽光を跳ね返してキラキラと光っています。

私は静かにドアが開いたことに気づきませんでした。どうやら所長も気づきませんでした。

「あの、」

緊張した声で初めて私たちはそちらを見ました。

「電話、使いつらくて……」

照れたように俯いて三島真由美さんがペコリと頭を下げました。

私は内心でガッツポーズをします。所長が挨拶もほどほどに早速青石を呼び出します。

青石はレコーディングの途中だとかなんとか言っていたのですが彼女にOKが取れたことを伝えると直ぐに来ると言って電話を切ったそうです。

「よく決断できましたね」

「やれ、って子供たちに言われて。ねーちゃんのお話をもっとたくさんの人たちに聞かせてあげて、って」

それしか彼女は言いませんでした。だけど彼女がその言葉にどれだけ励まされたか、どれだけ悩んだかは伝わってきました。

青石浩介が事務所にやって来るまで三十分も掛かりませんでした。果たして事務所の前に停められたバイクはどれだけ酷使されたのでしょうか……？ お疲れ様、と私だけでも労っておくことにします。

「彼女が？」

所長が頷きます。彼女の少し強張るのがわかりました。

「はじめまして」

彼女が頭を下げます。

「詩ってくれ」

青石浩介が興奮した様子で言いました。

彼女は先ず私を、それから所長を伺って、頷きました。

そして物語が始まります。

氷姫のような童話調のお話ではなく、情熱的な恋とその顛末を描いたラブストーリーでした。

きっと童話なんて作るのは苦手なのでしょう。

彼女の語る言葉はある場面では泣きそうなくらい悲しくて切なくて、別の場面では親切で暖かで、

だけど物語は途中で終わってしまいました。

「ここまでしか、出来てないの」

続きが書けなくて、彼女があの時溢した言葉を私は思い出します。「わかったでしょ？　これがあたしの限界なの。歌なんて作れっこ

ない」

彼女は視線を逸らします。

「なあ」

青石は一見淡々としていました。急に彼女の手を取って言いしました。

「とりあえず俺と一緒に事務所きてくれねえか？　くそ……　なん
で俺、ギター持ってこなかったんだ」

いや、バイクだからだけどさ。と自分でつつこみを入れていました。

「えつと、え？　あの……」

彼女は不安そうに視線をさまよわせます。所長はただ微笑していました。彼女の視線が私で止まります。

わかりませんか？　これがあなたの才能です。私には与えられなかったものです。

私はその時どんな顔をしていたでしょう？　青石浩介に手を取られて彼女が私から目を逸らします。私はそつと隣室に逃げました。私はまともな恋をしたことはありません。テレビの中の青石浩介がほとんど初恋と言って過言ではないのです。

ようするに私にとってついさつきまで目前にあつた光景は失恋と
いって差支えがありませんでした。私は泣いてたのです。なんだか
今回は泣きっぱなしですね。

ドアが開いて、閉じる音がしました。彼女と青石浩介が出て行っ
たのでしょうか。しかるべき場所で行うのでしょうか。

コンコンと二度ノックされます。

「なんか知らんが、大丈夫か？」

急にドアを開けないその微妙な気遣いが心地いいです。が、それ
以上に所長に気を使われていることに腹が立ちます。

「三分……、いえ、五分ください。それでなんとか泣き止みますか
ら」

「……なんていえばいいかわからんが」

所長はぎこちなく言いました。

「おつかれさま」

決して気の利いた言葉ではありませんでしたが、それが所長の精一杯なんだろうなと私は思いました。

「あれ？ 珍しいね。こんな時間に出かけるの？ 雨降ってるのに」
テニスサークルの帰りらしい光さんに尋ねられました。こんな時間、といってもまだ夕方ですが私がこの時間に出かけることは確かに珍しいかもしれません。

「ええ、ちよつと所長のところに」

「え、もしかして川口ってばあのイケメン所長さん捕まえたの？
いいなあ」

光さん、寝言は部屋でどうぞ。

「私は男性は見た目より中身で選ぶつもりなので所長はダメですね」
なにせ性格がいろいろ終わっていますから。

「またまた、狙ってないわけじゃないんでしょう？ あ、仕事上ぎくしゃくするのが嫌でなにも言い出せないとか」

私はジト目で光さんを見ますが光さんはそんなことを気にも留めずに妄想全開で話し続けます。しまいには川口のことが好きだけど所長さんには心に留めた別の女性がいるから付き合えないんだ、とか意味不明な話に飛び火したので私は光さんを置いて事務所への道を歩き出しました。

別に仕事ではないのになぜ雨の日の夕方に事務所に向かうかと言うと私の部屋にはテレビがないからです。

「遅い。もう始まるぞ」

「でも所長、彼が出るのはきつと番組の最後のほうですよ」

「……そうなのか？」

「テレビに疎いんですね、所長は。引つ張るだけ引つ張って視聴率を稼ごうとする音楽番組の常套手段ですよ」

「へえ、まあ他に見るものもないしとりあえずつけとくか」

その音楽番組は音楽よりもむしろ司会者が喋るのが中心で所長も私も幾分つまらなさそうにそれを見ていました。あるアーティストの言葉にふと司会者が「やっぱり才能のある人はいうことが違いますね」と言います。

「才能がないなんてのは努力が足りない人間の逃げだと俺は思うんだ」

所長がポツリと言います。

「それイヤミですか？」

「ああ、そうだ。俺は天才だからな」

私は所長をぶん殴りました。

「所長は天才ってなんだと思いますか？」

「自分を天才だと本気で思えるやつ」

なるほど。少時的を射ている気がします。自分の平凡さを思い知らされるばかりの世の中で自分を天才だと思い続けられる人間は確かにある種の天才かもしれません。疑わないことはなによりも難しいです。

「お前はどう思うんだ？」

「努力できる才能のある人、ですかね」

だって、本気であることを笑われて、嘲られて、そんな世の中で努力し続けられる人はすごいじゃないですか。

そして青石浩介が歌い始めます。

聴いていてなんだか「ああ、そういえば私にも夢があつたな」と思い出しました。私は昔、先生になりたかった気がします。私はそのための努力すら放棄して諦めてしまいました。お前みたいなやつが誰かになにかを教えられるものかと誰かに笑われている気がしていま思えばあるとき私を笑っていた誰かは私だったのです。そして私はことに気づきませんでした。

所長は新しく買ってきた薄型のテレビのスイッチを切りました。青石浩介の出番が終わったからです。

「いい歌だったな」
「はい」

何もできない。
だから何かがしたい。

そうしめられていた青石浩介の新曲である「春の詩」はきっと少しずつでも売り上げを伸ばして行くでしょう。

「世界ってすごく狭いんですね」

どこの町でも焼き増したように同じように人が暮らしていて同じように何かと戦っています。同じようにもがいて同じように逃げ出して同じように勝利します。

特別ななんてありふれています。手の届かないものではないはずで
す。私はそこまでがんばれるのでしょうか？ 答えはわかりません。
ただがんばってみたい気がします。

電話が鳴りました。所長が受話器を取ります。事務的な口調が少し揺らいで「お前に代わってくれてさ」こちらに受話器を差し出します。

「私に？」

誰だろう？ 思いながら取ります。

「もしもし」

という私の声は緊張で少し高くなっていました。

「あの、……女の人？」

私は不覚にも少し吹き出してしまいました。そういえば名前を教える機会がありませんでしたね。

「川口湊と言います」

名乗ると「みなとさん」と呟くように言います。

「あの、ありがとうございます」

ポカンとなつてしまいました。私にありがとうございますなんて言われる資格はありません。もし自分が彼女のようなお話を作れたら、彼女の

背負うものや努力も考えずにただ不満をぶつけるなんて最低のことをしてしまいました。なのに…… 少々迷った末に私は「どういたしまして」と言っておくことにしました。

結果としてそれが彼女の背中を押す事になって、彼女がいま幸せならばそれは私のお陰なのです。世の中ではいつも結果よりも過程が重視されます。

それから少しだけお話して、彼女は誰かに呼ばれたらしく「えっと、それじゃあ、また」と言ってお話を切りました。

「なんて言ってた？」

所長が尋ねてきます。

「ありがとう、って」

「そっか」

珍しく所長はとても穏やかな顔をしていました。その顔があんなにも優しく、なぜか切なくて私はどきりしました。

No. i e t , s n o t .

例えば世界というやつの理不尽さを挙げてみるならあなたはなんというでしょうか。私は長い間かけて育てた希望をほんの一瞬で消し去ってしまうことにあると思います。

冬が近くなり、木枯らしが吹き始めました。それに伴って悪魔払い探偵事務所は本格的な過疎化を迎えていました。事務所の電話はこの一ヶ月のあいだ一度も鳴ることはなく来客もありません。あ、三島さんが一度だけ訪ねてきました。お茶を飲んでお菓子を食べて雑談をして帰っていきました。以前よりもずっと笑顔が多くて私は嬉しくなります。それ以来本当に何もありません。ええ、所長と私が営業時間中にトランプを始めることができる程度に過疎化しています。なんだか本格的に給料泥棒と化してきましたね、私。

所長の手が私の手札の中にあるジョーカーを掴みます。それから私の目を見ます。私は努めて無表情を作りました。

「これじゃないな」

所長はあっさりそれを手放し、隣のカードを取って最後の手札を中央に投げました。

「な、なんでわかるんですか!」

「お前、わかりやすいんだよ」

「所長がわかりにくいんです」

私はカードを投げます。所長はイカサマではなく素でカードゲームが強いのでぶん殴ることができません。むしろ私がイカサマしようとしたのですがすぐに見破られてしまいました。以前に数字のゲームでハメたのを相当根に持っているらしいです。ババ抜きはこれで私の三勝十敗です。どや顔がム力つきます…… ちなみに二人なので重要なのは実質ジョーカーの位置だけです。

「やめです! 所長のようなカス人間と真面目にゲームに興じた私

が間違っていました」

「真面目にゲームに興じた、ねえ…… 十三回のゲームで二十回以上イカサマやろうとしてそれだけ言える根性は褒めてやる」

わーい、褒められました。

「はあ」

あまりのひまさに溜め息を吐いてしまいました。

「ま、こんなもんだぞ。うちの事務所は」

所長はコーヒーを啜りながら言います。珍しく自分で淹れたものです。カップの中に目を落として妙な顔をしています。どうしたんでしょう？

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもない」

所長はカップを降ろしてトランプを片付け始めます。

「所長つてまさか客が来るのがうざいから『悪魔払い探偵事務所』なんて名前をつけたんじゃないやありませんよね」

所長が感心したような顔をしました。

「よくわかったな」

「……私にはもう所長がわかりません」

「あつはつは」

とつてつけたような笑い声でした。

「人と関わりたくない時期があつたんだよ。引きこもってもよかったんだが周りがうるさくてな、ここを作ったのはいわば口実なんだ」
軽い口調なのに妙に重く響きました。白い部屋が冷たいです。私は空気を読みませんでした。

「所長の昔の話って、ちょっと聞いてみたいです」

それは私としてはかなり勇気を振り絞った発言でした。所長は明後日の方向を見たあと私に向き直ります。

「ま、いつかな」

「いつか、ですか」

「百五十年後ぐらい」

「キレイのない返答ですね」

「おお、お前にダメだしされるとは思わなかった」

誤魔化されるだけでなくそこはかとなくバカにされていますね。とりあえず暇潰しを兼ねて所長をぶん殴りました。が、避けられてしまいました。

「むう」

「……タイミング掴めるほどお前に殴られ慣れた自分がなんか妙に悲しいな」

所長は沈んだ顔をしました。拳は届きませんでした。結果として精神的に落ち込ませることができたのならまあよしとしましょう。

「……所長？」

所長はドアの辺りで視線を固めていました。ドアが開いていることにそれまで私は気づいていませんでした。一人の男性がそこに立っています。

「やあ、ノックをしても返事がなかったものだからね」

そこに立っていた彼は言いました。

「お久しぶりです！」

「ああ、久しぶり。二人とも元気だったかい？」

穏やかな笑顔で私と所長を見渡したのは私の叔父の榎本達真でした。会社帰りらしい上品な濃紺のスーツに今年四十とは思えない若い表情が映えます。

「来るなら連絡くらい寄こせよ」

「敬語を使えといつも言っているだろう。いつまで経っても礼儀がならないな、お前は」

所長が舌打ちを一つしました。叔父は鋭い目で所長を睨みつけています。

あ、あれ……？ 想像していたよりずっと陰悪な雰囲気です。

所長は無表情ながら敵意のようなものを撒き散らしていますし、叔父も私の知る落ち着いた雰囲気ではありません。そういえば叔父は所長が刺された時も見舞いに現れたりはしませんでしたね。

「川口」

所長が低い声で言います。

「なんですか」

「お前、今日はもういいから帰れ」

「嫌です」

「帰らなかつたらクビ」

横目に私を見た所長の目はさすがのような弱々しいものでした。そんな目をされてしまつては、私は引き下がらない訳にはいきません。「はい」

少ない荷物を持って大人しく事務所から出ます。とはいえこんなおもしろそうなチャンスを逃す気は私にはさらさらありませんでした。険悪な仲だというのにわざわざ訪ねてきたということは積もり積もつた話があるのでしょうか。しかし抜け目のない所長のことですから私が階段を降り切るまでは話し始めることはないと思います。恐らく判断の基準は足音です。私は事務所の階段の段数を思い出します。確か十四から十六段だったと思います。もし十四だった場合、十六踏めることはありえないので十四回にしましょう。私は階段の一番上で足踏みをします。カンカンカン、と金属性の階段は高い音を鳴らします。十一、十二、十三、十四、つと。次に靴を脱いで足音を立てないようにそつと事務所の扉に近づきゆっくり耳を押し当てました。

「……、でいまさら何をしにきたんだ？」

「いいや、本当にどうしているか様子を見に來ただけだよ」

「じゃあ言い方を変えようか。なんであんなやつを送つてきた？」

あんなやつ……？ ああ、私のことですか。

「楽しかつただろ？」

「冗談いうな。役に立たない、暴力は振るう、文句は言う。使えたもんじゃない」

所長、私のことをそんな風に思つてたんですか！……やっぱり。笑つなつての」

「いや、お前が苛立つなんて学生時代から珍しかったから、あの子を送った甲斐があったなと思って」

「お前、俺を苛立たせたかったのか？」

「そうじゃない、……あ、いや、そうなのか？ ああ、うん。そうだ」

「こないだあいつが料理に使った包丁まだ置いてなかったっけな」
「待て、早まるな。冗談だ」

叔父が慌てたような声を出したのが私には新鮮でした。

「少なくともお前は理論と理屈でものを考えすぎなんだ。人つてのはもっと楽でいられるように出来てるんだからお前ももっと人生楽しまないと損だぞ」

「余計なお世話だ」

「湊に気づかされたところはあっただろう」

舌打ちが聞こえました。えっ、所長つてそこまで私のこと嫌いだったんですか？ ちょっと泣いてもいいですか。

「お前はどこか機械じみてる。有能だし行動力もあるがそれだけだ。書面で人を判断したら痛い目に会うのはわかっただろ？」

「確かにあの大学に合格した人間にしては川口はお粗末だが、あれはレアケースじゃないのか……？」

所長は叔父の用意した書面に騙されて私を雇ったんですか！？

「そう、確かにレアなケースだろう。だがレアなケースがこれから起こらないとは限らない」

「まあな」

叔父まで……ぐすん。

「俺は人間の合理的でない部分に疎い、って川口に言われたんだが、つまりあんたが言いたいこともそういうことか」

「あの子の言葉はたまにあっさりと核心を突くな。まあそんなところだ」

「俺に何か言う事はないか？」

「すまなかった」

「いずみに何か言う事はないか？」

「すまなかった」

二回目は少し答えるのまでに間がありました。

「逃げんなよな…… いや、俺がお前の立場ならきつと俺も逃げたんだろうけどよ」

「いいや、お前は逃げなかったさ」

「根拠は？」

「人間の合理的でない部分に疎いからだ」

「なるほど、把握していてもお自分の中の恋愛感情を整理しきれない、か」

「人間的だ」

「ああ、非合理的でもあるな」

乾いた沈黙が扉越しにも伝わってきました。風が吹いて私は寒いなと思います。

「まあいまさらだな、いずみはどうしてる？」

「相変わらずさ」

「そっか、あいつには悪いことしたな」

「お前のせいじゃない」

「そうだな。お前のせいだ」

「恐いな…… 本当にお前に殺されかねん。僕はもうそろそろ帰るとするよ」

げっ。

叔父が出てくる前に足音を立てないようにして階段を降りました。そして降り切ってから気づいたのです。私、靴を置きっぱなしでした。

…… 私という人間はなぜこうも間が抜けているのでしょうか？

土埃が染み込んで底の黒くなった靴下がかなり虚しいです。階段を下る叔父の足音が近づいてきます。ここで逃げても無駄ですので私は大人しく叔父待ち、あわよくば靴を取ってきて貰おうかと思いません。

「盗み聞きは感心しないよ」

叔父は私の靴を持ってきてくれました。ああ、本当に叔父はなんて優秀な人間なんでしょう。

「ごめんなさい」

「僕に不満はあるかい？」

「……？ いいえ」

どういう意味でしょう？ 叔父はにっこり笑って「赤山は扱い辛かっただろう？」と言いました。私はそんなことはありませんでしたよ、と言おうとしたのですが正直者を自負している私ですからどうしてもその一言が吐き出せません。私はいま人間としての価値を問われています。社会人ともなれば心にもないことを平然と口にだせなければいけないのです。ファイトです、私！

「ソナナコトハゼンゼンマツタクアリマセンデシタヨ」

これが限界でした。無念です。

「ああ、そうだ。湊に言わないといけないことがあったんだった」
「？」

「湊、携帯電話は？」

「ああ、使わないので電源を切ったまま家に置きっぱなしですね」
「それでか」

叔父は神妙な顔をして一度頷きます。

「田舎に帰りなさい」

「……なんですか、急に」

「急にじゃない。湊の携帯に昨日からずっと掛けていたんだ。大学に連絡するか僕がここに行くかで、僕が来たんだ」

「……どうしてまた？」

「君のお父さんが、今度は本当にリストラされたんだよ」

「その手には、乗りませんよ？」

「悪かったと思ってる。だけど今回は、ほんとなんだ」

「……」

「とりあえず、行こう」

叔父は私を乗せて車を出しました。古い車は煙草の匂いがします。私はこの匂いが少し苦手です。

学生寮は引き払って欲しいそうだ。少し遠いけど定期券を買って電車で通えるかい？ あそこのアルバイトはやめたほうがいい。地元で新しく見つけなさい。今度から携帯電話の電源は入れておくようにね。

そんな話を幾つか聞いた気がします。

どうしよう。なんだか頭が真っ白です。電車で二時間の道のりは掛かった時間はそう変わらないのに恐ろしく長く感じました。夏には暖かに私を迎えてくれた風景は冬枯れの冷気を淡々と讃えています。山の季節は一足早いのです。

家に帰ってきました。

「みいちゃん、お帰り！」

「おう、よく帰ったな」

母はしきりに笑顔で私にいろいろ話し掛けました。

「大学にはもう慣れた？」

「いいえ、慣れません。」

「楽しい？」

「まだ、わかりません。」

「友達はどう？」

「きちゃんと友達と呼べる人は居ないかもしれません。」

「アルバイトはどうなった？」

「辞めないといけないのは少し寂しいです。」

「寮は寂しかった？」

「いいえ、とても快適でした。」

……なんて言えるはずもなく私は無難な答えとはぐらかすことを続けていました。そんなぎこちない嘘にさえ母は気づくことはあ

りません。私などよりも母はいまよほど大丈夫ではないのです。

父も似たようなものでした。父は自分たちは大丈夫だからお前は心置きなく大学に通いなさい、ということを行い方を変えて何度も繰り返します。いかにも温厚そうな父の顔にはいつもより多くのしわがよっていました。

二人とも私を落ち込ませないように無理をしているのだと一目でわかります。これでは学生寮に留まりたいだなんて口が裂けても言えそうにありません。

ああ、本当に父はクビになったんだ。

私は今更のように思いました。私はやはりまた、私に何かさせるための母のタチの悪い冗談ではないかと疑っていたのです。いえ、疑っていたのは少し違います。きつとそう信じたかったのです。

私は変化というものが嫌いです。新しい物は馴染むまでに長い時間が掛かってしまいます。あの奇妙な探偵事務所での生活にも私は長い時間を費やしてようやく馴染んできたところなのです。

それなのにどうして私はまた居場所を奪われてしまうのでしょうか？ なぜ神様はいつだってこうも残酷な仕打ちをするのですか。

何の苦労もなく悠々と生きていくことを一部の人間にだけ許して私には許してくれないのでしょうか。無論、私は答えを知っています。神様なんていないからです。もしいたとすれば所長の如き性悪なクソ野郎だからです。

無性に泣きたくになりましたが私は自分に泣く事を許しませんでした。それは私が辛いから流すだけの利己的な涙であって、私より辛いはずの父や母に対する涙ではなかったからです。

なぜ私は不幸なんですか？

「お前が自分のことを不幸だと思ってるから。客観的にお前より不幸でも自分を不幸じゃないと思えるやつはたくさんいるさ」

あなたは幸せですか？

「少なくとも不幸じゃないと思うぜ」

リア充、爆発しろです。

「自分以外はみんな不幸になれってか？ ガキかよ」

少なくとも誰でもそこそこ思ってることでしょう？

「俺は思わないな」

どうしてですか？

「誰かが不幸になっても自分が幸せになるわけじゃないから」

でも自分より不幸な人がいると少し安心しますよ、私は最下位じゃない、って。

「どうして？」

どうして、って。人間ってそういうものでしょう？

目を覚ますと視線の先に木目がありました。ああ、ここは学生寮じゃないんだなあ。寝ぼけ眼を擦ります。実家の布団は陽の匂いします。私が留守の間も母がきれいにしてくれました。そうですね、学生寮の布団はもうしばらく干していません。

「はあ……」

引き払わないといけないんですね、もう。

月末までは居てもいいそうですが、月末まではあと二週間もあります。整理をつけるには充分ですが、あまりにも短くもあります。時計を見ると十一時と半でした。リビングへ出ると母はもう起きています。私がおはようというとうと母がにっこり笑っておはようと返します。しかし目の下のクマはその笑顔からひどく浮いていました。父が見当たりませんでした。多分働き口を捜しに行っているのでしょう。父は叔父とは別の意味で責任感の強い人です。必要以上に自分を責めてしまうところがあります。

「……」

思えば高校時代の私は父や母に心配ばかりかけていた気がします。少しのことで落ち込んで帰ってきましたし、学校を休むこともよくありました。励まされるのは辛かったし、辛い顔をされると泣きたくなりました。それでも二人は私を支えようとしていたのです。

今度は私が支えていこう。いまはそう思えます。

私は母が作ってくれた朝食を食べました。歯を磨きます。母の化粧品を借りてへたくそな化粧をしました。

「どこかに出かけるの？」

心配そうな顔をして母が尋ねてきます。私はなるべく明るく見えるように表情を作りました。

「学生寮を引き払ってきますね」

泣いていないか不安でしたがどうやら母を騙せる程度の笑顔は作れたようです。

私は家を出て、昼前のようにやく僅かにだけ陽気の射してきた陽射しを浴びながら駅まで歩きました。お金を入れて切符を買い、改札に通してホームに出ます。少し待って人がまばらな駅から電車に乗りました。都会に近づくに連れて人が多くなります。それらを眺めて羨ましいような恨めしいような妙な気持ちになりました。電車を降ります。二本の電車を乗り継いで私は目的地に到達します。二時間少しは前よりもかなり長く感じました。

学生寮に着いてまずは光さんに近い内にここを出ることを話しました。光さんは「お別れ？ 大学で会えるじゃん」と気楽な調子でしたがお隣さんというよしみがなくなってしまうえば光さんと普通に友達していることはきつとないでしょう。

元々掃除は嫌いではなくそこに片付いていましたから直ぐに必要な荷物はまとめ終わってしまいました。私が十ヶ月近く過ごした部屋はこんなにあっさり元に戻るものだったんですね。

「……」

私は部屋を出て探偵事務所に向かいました。あえて何も言わずにばつくてやろうかなとも思ったのですが、やっぱり所長は所長な

のできちんとお別れは告げようと決めました。

いまでは大学以上に通り慣れたこの道も、最初は叔父に地図を貰わないとさっぱりだったんですね。

十六段の階段を登って事務所のドアを叩きます。今日は本来休みの日ですから客かと思ったのでしょうか。「どーぞ」普段では私に向けない誠実な声が向こうから聞こえます。私はドアを開けました。「本日はどうなさいましたか？」

所長はデスクについたままでした。お客さんがきたときくらいは文庫本を捲るのをやめるのですが、視線はそちらに固めたままです。「どうして私だとわかったんです？」

「なんとなくだ」

私の歩き方とかに癖があるのかもしれませんが。所長が視線を上げます。深い色の瞳が私を見ます。射すくめられたように私は何も言えなくなってしまう。……嫌です。ようやく慣れてきたこの場所を私はまだ失いたくないです。

「……本日はどうなさいましたか？」

所長は気だるそうに言います。

「謝りにでもきたか？ 盗み聞きしててごめんなさいって」「気づいてたんですか？」

「階段を降りたなら足音が均一なのはおかしいだろ」「どうやら私はどこまでもこの所長に敵わないようです。

「違い、ます」

「へえ、じゃあなんだ？」

私は、なるべく明るく聞こえるように言いました。

「所長、ここちよつと給料安すぎです！」

「上げてやる気はないぞ。ただでさえ仕事少ないんだからよ」

「上げてくれないんなら、」

上げてくれないんなら、なんでしょう？ 続きが言葉になりません。所長が薄く溜め息を吐きました。妙に察しのいいところのある所長はもう私が何を言おうとしているのか気づいているのかもしれない

ません。あるいは叔父に聞いているのかもしれませんが。

「や、……辞めてやります！」

「あーやめろやめろ、清々するよ」

私がやつとのことで吐き出した言葉に所長は呆れた口調で返します。私を引き止めませんでした。いま所長に引き止められたら私はきっと泣いてしまうのを察して、というのは所長を過大評価しすぎでしょうか？ 初めて会ったときの所長ならば「居ても居なくてもこっちでもいい」とか言つて、私を泣かせたんでしょうね。

「ところでさ、お前に一つだけ聞きたいことがあるんだ」

いまさら私が所長に教えられることなんてあるのでしょうか？

所長は妙に真面目な顔をしています。

「なんで同じ豆と湯を使ってるのにお前が淹れたコーヒーのほうが美味いんだ？」

私は吹きだしました。何がおかしかったのかわかりません。所長がクソ真面目な顔をしているのがツボだったのかもしれませんが。一頻り笑つて、私は言います。最後の意地悪です。

「教えてあげません！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、^{たんのう}堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7450s/>

悪魔払い探偵事務所 ～捻くれ所長とニートな私の更生記～

2011年5月1日03時10分発行